

琉球大学学術リポジトリ

芥川龍之介研究ノート

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2010-04-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小澤, 保博, Ozawa, Yasuhiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/16474

芥川龍之介研究ノート

小澤 保博*

A Study of Note on R. Akutagawa's Work

Ozawa Yasuhiro*

目次

- I 「お律と子等と」
- II 「点鬼簿」
- III 「玄鶴山房」

I 「お律と子等と」

はしがき

原題「お律と子等と」（「中央公論」大正九年十月～十一月）を論じるには、それ以前の「秋」（「中央公論」大正九年四月）「捨子」（「新潮」大正九年八月）の二つの先行作品について言及しなくてはならない。さらに私には「お律と子等と」を論ずる上で一つの仮説がある。芥川龍之介は、「邪宗門」（「東京日日新聞」大正七年十月～十二月）「路上」（「大阪毎日新聞」大正八年六月～八月）「妖婆」（「中央公論」大正八年九月）等の中篇小説に意欲を持ち、夏目漱石の文学的傾向を受け継ぐ意志を持っていた。「お律と子等と」の創作、結果的にはその挫折意識が、芥川龍之介に作風の転向をもたらしたという仮説である。つまり、芥川龍之介は幾つかの試行錯誤の創作の中絶で師の漱石が成した朝日新聞を舞台にする物語性のある作風を捨てたのである。森鷗外文学の継承という観点で言い換えれば、「青年」の作風を捨てて「諸国物語」を典拠とする従来^{ストーリー}の傾向に立ち戻ったと言える。このことは、「お律と子等と」をこれから詳細に論じることで明らかになるはずである。作品構造から言えば、同一である「点鬼簿」（「改造」大正十五年十月）とさらに「玄鶴山房」

（「中央公論」昭和二年一月～二月）が、作品的成功を収めた理由の解明に繋がるであろう。「秋」については、三島由紀夫『「南京の基督」解説』が次のように言及して参考になる。

「秋」は堀辰雄の「菜穂子」の先蹤^{せんしゅう}のやうに思はれた。（中略）かういふ方向を掘り下げ、拡げてゆけば、芥川にとつて最適の広い野がひらけたと思はれるのに、時代が熟してゐなかつたせるもあるが、この作品が一個の試作品に終つたのは惜しい。

作品「秋」は、芥川龍之介が新機軸を打ち出した画期的な作品で作者自身もさらなる跳躍を期す心積もりであった。「今日『秋』を読み候一つ二つ氣になる所なきには候はねどまづあの位ならば中央公論第一の悪作にても無之かる可き乎」（「瀧田哲太郎宛書簡」大正九年四月九日）「秋は大して悪くなささうだ」（「瀧井孝作宛書簡」大正九年四月九日）さらにこの時期「我鬼窟」に出入りしていた森幸枝、後年秀ひで子、野々口豊子程ではないが芥川龍之介と交渉のあった女弟子宛「私は九月號の中央公論に原稿が間に合はなかつた為十月號に寄稿する事になつて毎日机に向つてゐます」（「森幸枝宛書簡」大正九年九月八日）と書き送っているが、この作品が「お律と子等と」と類推されている。

* 国語教育教室

「秋」の素材提供者と目されている秀しげ子は、「秋」発表半年後に当事者として作品についての所懐を述べた。「根本に触れた描写」（「新潮」大正九年十月）が、それである「芥川氏の『秋』」などを評判はよかつたやうでしたが、あゝ云ふ材料をあゝもすらすらと片づけてしまはづにもつと信子や照子の心理状態を深刻に解剖して知識階級にある現代婦人の人生に対する人間苦を如実に描写してほしいと思ひます。」。結果的には、芥川龍之介はこの秀しげ子の要請に^た応える形で「お律と子等と」を創作したようになるが、秀ひで子「根本に触れた描写」を読んで芥川龍之介が、参考にしたのではなくて直接彼女から「秋」批判を聞き「お律と子等と」執筆に立ち向かったのであろう。

「お律と子等と」は、作風は半年前に発表した「秋」のそれを踏襲するものであるが主題は、直前発表の「捨子」のそれを受け継ぐものである。言い換えれば「お律と子等と」の作品内部には「秋」「捨子」の二つの作品の作風、主題が渾然としている。「捨子」については、「芥川龍之介事典」（「明治書院」）所収の渡部芳紀作成の解説を使わせて戴く。

明治二十二年の秋、浅草^{ながすみ}永住町^{しんざう}の信行寺の門前に男の子が一人捨てられた。当時の住職田村日錚^{にっそう}老人は、もと深川の左官だつたでんぼう肌の崎人^{さきじん}で、捨て子に勇之助という名をつけ、わが子のように育て始めた。生みの親に会わせたいと、豪傑^{もう}じみていても情に脆い日錚和尚は、説教で親子の恩愛についてたびたび語った。明治二十七年の冬、母親と名のる女が涙ながらに勇之助を引き取り、針仕事を教えてその子を育て上げた。その捨て子が、客の松原勇之助であった。勇之助の母は一昨年亡くなったという。母の亡くなる前年、ひよんなことから勇之助は、母が実の母でなく、嘘^{うそ}をついて自分を引き取って育てたことを知った。

「捨子」の典拠については、赤羽學「芥川龍之介の『捨子』先行する三作品」に指摘されている。それに拠れば謡曲「生田敦盛 御伽草子 小敦盛」さらに「撰集抄」（「志賀ノ中将遁世流浪ノ事」巻四の第二）の三作品が典拠として考えられるという。「捨子」は、従来の芥川龍之介作品の定型に沿う形で最後の一文で作者の分身が、半身を乗り

出して個人的な感想を述べていることである。『（前文省略）母は捨て子の私には、母以上の人間になりましたから。』客はしんみりと返事をした。恰も彼自身子以上の人間だった事も知らないやうに。』（「捨子」）、この場合作中の「客」とその話に聞き入る「私」とは、作者である芥川龍之介の分身である。渡部芳紀が、指摘するように作品「捨子」の背景には芥川龍之介自身の捨子体験、さらには実母の姉により養家で育てられた体験の反映があろう。

司馬遼太郎「王城の護衛者」には、会津藩主として迎えられた松平容保^{かたまり}の養家に残された藩始祖の家訓「一藩の滅亡を賭してでも徳川宗家の危難に赴け」に殉ずる姿を描いた。現代小説では、山崎豊子「白い巨塔」の財前五郎は養家の名誉の為に一身を投げ打って奮戦する。芥川龍之介自身も遺書で「今僕が自殺するのは一生に一度の我儘かも知れない。」と本音を漏らして奮戦の後、養家で自殺して果てた。しかし、「捨子」には芥川龍之介がその生立ちで背負ったと思える暗い影は見出せない。

芥川龍之介が「捨子」をさらには、「お律と子等と」を執筆した背後には、新原家と芥川家の関係が示唆を与えていると思える。実母新原ふく（「明治三十五年十一月二十八日」歿）、新原敏三（「大正八年三月十六日」歿）、さらに新原敏三の後妻として異母弟新原得二を生んだ新原ふゆ（「大正九年四月二十一日」歿）、こうした実家の惨憺たる状況で「捨子」のような作品が生まれた背景には、実母ふくの姉である芥川ふき（「昭和十三年八月四日」歿）の存在が大きい。芥川龍之介没後、芥川ふきは芥川文に遺言を遺して逝った「芥川家をたのむ」（「^{通題}芥川龍之介」十一）と云うのがそれである。

実母芥川ふくに代わって幼い幼児より芥川龍之介を育て上げた伯母芥川ふきに対する愛情は、格別なものがある。伯母芥川ふきの存在は、「或阿呆の一生」（「十四」）や「どのようなことでも一応私に報告してから、行動するように」（「^{通題}芥川龍之介」二）という芥川文に語る言葉からその存在を知り得る。「家中で顔が一番私に似てゐるのもこの伯母なら、心もちの上で共通点の一番多いのもこの伯母です。」（「文学好きの家庭から」大

正七年一月) 後年、芥川龍之介は死の直前に佐藤春夫に対して「僕の生涯を不幸にしたものは伯母なのだよ。尤もこの人は僕の無二の恩人なんだがね」(「改造」昭和二年九月)と述懐した。しかし、「捨子」執筆時には実家新原家の現状、惨状を直視し自分を慈しみ育て上げた伯母芥川ふきに対する感謝の念は、一方ならぬものがあつたはずである。この時期の芥川龍之介の伯母芥川ふきに対する心情が、「蓮華夫人が五百人の子とめぐり遇つた話」(「捨子」)を作中に引用する行為に繋がつたと見られる。

蓮華夫人が五百の卵を生む。その卵が川に流されて、隣国の王に育てられる。卵から生れた五百人の力士は、母とも知らない蓮華夫人の城を攻めに向かつて来る。蓮華夫人はそれを聞くと、城の楼に登つて、「私はお前たち五百人の母だ。その証拠は此処にある。」と云ふ。さうして乳を出しながら、美しい手に絞つて見せる。乳は五百条の泉やうに、高い楼上の夫人の胸から、五百人の力士の口へ一人も洩れず注がれる。(「捨子」)

「高橋全集芥川龍之介全集」所収の吉田精一脚注に拠れば、「捨子」作品中に引かれたこの譚の出所は、「蓮華夫人縁」(「雑宝蔵経」巻一)であるが、芥川龍之介は「今昔物語」(「般沙羅王五百卵、初知父母語第六」巻五)の翻案に拠るであろうと吉田精一は、類推している。「捨子」に描かれた母と息子の話は、普遍的な愛で他者が結びついた筋であるが、実の妹の息子龍之介を献身の愛で育て上げた伯母芥川ふきとの良好な関係を憶測させる。しかし、「捨子」のような愛の普遍化された作品は、芥川龍之介の本意ではない。「秋」や「捨子」の傾向の作品を書き続けていけば、芥川龍之介は明らかに白樺派の末流に位置してしまう。「知識階級にある現代婦人の人生に対する人間苦を如実に描写してほしい」(「秀しげ子」)という直接の要請に応える形で成立した作品が、「お律と子等と」であつた。この作品の完成度の未熟さが、創作上の内心の挫折感が、江戸っ子の出不精の芥川龍之介に長期の中国視察旅行を成さしめたと言える。

作品登場人物は、メリヤス問屋の主人賢造とその妻お律、二人の間に生まれた洋一。賢造には既

に他家に嫁いでいる先妻との間に出来た娘のお絹がいる。お律は病死した夫の残した息子の慎太郎を連れて賢造との新しい家庭生活を持った訣である。一組の夫婦に三人の子供がいて洋一、慎太郎、さらにお絹である。洋一にとっては、両親は実の親であるが、慎太郎にとって賢造は義理の父親であり、お絹にはお律が義理の母になるという設定である。「『お律と子等』の批評を書いて下さつた由」(「小島政二郎宛書簡」大正九年十一月十一日)とあるが、これは小島政二郎「芥川さんの『お律と子等』を評す」(『時事新報』大正九年十一月九日～十日)でこれに拠れば、芥川龍之介は取材の為に小島政二郎同伴で日本橋横山町を探訪している。

後年、三島由紀夫「絹と明察」(「講談社」昭和三十九年十月)では、近江絹糸労働争議(「昭和二十九年六月」)をモデルにした作品創作の為に彦根、近江八景に取材旅行をして苦心の末に脱稿した。しかし、悪徳資本家をめぐる労働争議という固定的な図式で作品的に成功したとは、言い難い。松本清張は、題材が題材だけに柄にもなくて失敗したと酷評した。「お律と子等と」もまた、題材が題材だけに柄にもなく失敗したと言える。しかし、作品的な成功を収めている箇所も散在する。「捨子」と同じく芥川龍之介の義母に養育されて養家に育つた経歴の反映である。ダンテ「神曲」に、「他人のパンがいかに辛く／他人の家の階段の上り下りがいかに辛い道であるかを」(天国篇第十七歌五十八、五十九行)という有名な詩句があるが、「お律と子等と」の題材には芥川龍之介独自の視点がある。

「(前文省略)あれは未完ですもう二三回通夜や墓の事を書かないと纏りません(今度はお絹を主人公にして)但しもう嫌気がさしてゐます」(「小島政二郎」大正九年十一月十一日)この芥川龍之介書簡を手がかりに坂井二三絵「芥川龍之介『お律と子等と』論」(「阪大近代文学研究」平成十七年三月)は、「お律と子等と」(「一」～「三」)が次男洋一の視点から描かれていて「お律と子等と」(「四」～「七」)は長男慎太郎の思いを中心に語られていると指摘した。すると芥川龍之介書簡に拠れば、お律死後の何章かがお絹を視点として描かれる筈であつた。通夜や墓の事がお絹の視

点から描かれる筈だったが作者は、その意欲を喪失したのである。

1 (「一」)

メリヤス問屋の主人賢造は、妻のお律との間に儲けた次男の洋一にお律の容態の悪い事を告げて義理の息子の慎太郎を地方の高等学校の地から東京に呼び戻すように手筈を整える。賢造は、血の繋がらない義理の息子の慎太郎に引け目を感じている訣であるが、これに対する後妻のお律は、先妻の浅川の叔母に瀕死の病床で気を使っている。下町に生きる一組の夫婦の会話を引用すれば、以下の如くである。

賢造「まあ、ふだんが達者だから、急にどうと云ふ事もあるまいがね、一慎太郎へだけ知らせた方が一」お律「いいえ、叔母さんに梅川の鰻をとつて上げるの。」

互いに気を使い合い気苦勞の多い東京下町の生活の全般は、芥川龍之介にとっては幼年時代から見聞してきた実生活の一端であるが、その多くは「お律と子等と」の取材に日本橋の間屋街を散策した小島政二郎のものであった。小島政二郎「眼中の人」(「岩波文庫」)を読むと東京下町の祝儀の作法を知らない菊池寛が、芥川龍之介、南部修太郎、小島政二郎の面々の中で浮き上がっている挿話が記録されている。しかし、後年小島政二郎自身が慣習に囚われない菊池寛の合理的な生き方に脱帽している。東京下町で育った者と地方出身者との生活感覚のずれは、谷崎潤一郎、佐藤春夫両名の親友同士の間でも見られた。

亡き父を裏切る形で再婚した実母お律を兄の慎太郎は、不快に想いさらに義父に対してもその思いは同一である筈だ。こうした発想から次男の洋一の思いは次のようになる。

母は兄に会ひたがつてゐる。が、兄は帰つて来ない。その内に母は死んでしまふ。すると姉や浅川の叔母が、親不孝だと云つて兄を責める。(「一」)

有島生馬の長編書簡体小説「嘘の果」(「開放」大正十年一月)を「兎に角余り前途に望みを囁させる前篇でない事は事実である。」(「大正八年六月の文壇」大正八年六月)という書評に対して、有島生馬「嫌みで下等な書評」(「新潮」大正八年

十二月)と反論した。これらの一連のやり取りから「有島生馬君に與ふ」(「新潮」大正九年一月)という芥川龍之介らしからぬ一文が生まれた。この反駁^{はんぱく}に対しては、田舎者の佐藤春夫が賞賛した。さらに佐藤春夫は、痼癩^{こら}を起こした芥川龍之介が湯飲みを縁石に投げ捨てた行為を芥川龍之介の死後に聞いて、彼は日常生活でも日頃からこのように率直であるべきだったと嘆息した。松本清張「潤一郎と春夫」(「昭和史発掘」三)には、佐藤春夫の田舎者ぶりを東京日本橋生まれの谷崎潤一郎が揶揄する場面が、効果的に取り入れられている。和歌山新宮生まれの田舎者佐藤春夫を感激させた芥川龍之介の言は、「随分まごまごしてゐたが、此間は批評で大變失敬しましたと云つて一つ頭を下げた」(「嫌みで下等な批評」)という有島生馬の一文である。これに反駁した芥川龍之介「有島生馬君に與ふ」の都会人の社交を捨てた筆致を佐藤春夫は賞賛した訣である。

「お律と子等と」(「一」)で描かれている家族構成は、血縁的には希薄な下町の一家が互いに相手を気遣いながら日常生活を送る生活の細部に及ぶ描写である。さらに東京下町の家を描くのに病人の在りようを問うため占い師に状況を報告し、善後策を講じる場面がある。

封筒の中には手紙の外にも、半紙に一の字を引いたのが、四つ折の儘はひつてゐた。(中略)「今神山さんに墨色を見て来て貰つたんだよ。(後文省略)」(「お律と子等と」一)

下町の家で日常生活の細部に普遍的に介在していたこうした占い、お呪い等のオカルト的な生活感覚は、その後の関東大震災と東京大空襲で消滅した。日常生活の細部に亘って生活を規制する占い、迷信の類は当然山の手より下町に散在していて、東京よりも関西に色濃い。阿川弘之「志賀直哉」(「信仰と迷信」)には、京都の公家でしかも古い堂上家の末裔^{どうじょう}の志賀夫人に直哉が苛立つ場面を印象深く記録した。

2 (「二」)

翌日の朝、父の賢造と食卓に向かい合う次男の洋一は、母の病状を気遣って兄の慎太郎が帰宅するかどうかを話題にしている。株の暴落で長女の嫁ぎ先が損害を被った事や賢造自身も多大な損失

を出した事などが話題になる。洋一は、友人の観劇の誘いを断り一人で受験勉強の為に二階に閉じこむが、少年時代の兄との葛藤が回想される。兄慎太郎と兄弟喧嘩をした時に母のお律は、洋一を庇って先夫の子供である慎太郎を叱りつける。ここには病没した先夫よりも、今の夫である賢造に氣遣わねばならない後妻としてお律の立場がある。この時の兄の慎太郎は、実母の現在の弱い立場を、さらに自分の置かれた立場を思い号泣する。

「好いやい。」兄はさう云ふより早く、氣違ひのやうに母を撲たうとした。が、その手がまだ振り下されない内に、洋一よりも大声に泣き出してしまった。—（「二」）

兄の慎太郎は、弟の洋一から見た範囲では母のお律を、実父没後に再婚したお律を気持ちの上では許していない。その気持ちが、率直に現れたのが、「氣違ひのやうに母を撲たうとした。」（「二」）という記述である。その後「大声に泣き出してしまった。」（「二」）と続く。慎太郎は実母の後妻としての弱い立場を思いやり、さらには義父によって養われる自分の立場を思いやり号泣したのである。兄慎太郎と弟の洋一とは、実母に対する感覚が異なる。芥川龍之介は慎太郎、洋一という名前に二人の立場の相違を適確に表現している。慎太郎は先夫の家の長男であり、洋一は賢造の長男であるという命名である。本来ならば洋一は、洋一ではなくて洋二、あるいは慎二郎でなくてはならない。こうした兄弟の置かれた立場を認識した弟の洋一は、以下の述懐をする。

洋一は兄の見てる母が、どうも彼の見てる母とは、違つてゐるさうに思はれるのだつた。（「二」）

二階の勉強部屋で瀕死のお律を氣遣い、地方にいる兄慎太郎の帰宅を待ち侘びる弟の洋一に回想の一齣の一瞬が訪れる。兄が第一高等学校を拒み、東京の実家での生活、実母お律との同居を拒否して、地方の高等学校入学の為に東京を離れる前日に洋一と交わした会話の断片である。

「僕はお母さんが死んでも悲しくない。」（中略）「お前は何時でも小説なんぞ読んでゐるぢやないか？それなら、僕のやうな人間のある事も、すぐに理解出来さうなものだ。可笑しな奴だな。」（「二」）

一般的な理解であるならば、兄の慎太郎の人情の希薄を弟が嘆く一場面である。しかし、そうではなくて兄慎太郎の実母お律に対する過剰な愛の発露であると理解しなくてはならない。カミュ「異邦人」ではないが、「人間は誰でも自分の愛する者の死を期待するものだ」。「異邦人」の主人公の行動、母の葬儀を終えた後に恋人と戯れ、行きずりの殺人行為に走る。「異邦人」の主人公が弾劾されるこうした行為は、母の死が与えた打撃の大きさを、翻って考えれば彼の母に寄せた愛の尋常でなかった事の証明である。芥川龍之介は、早くから実存主義の先駆的な作品、カフカの幻想性、寓意性、不条理文学を学んでいた。最晩年は、一連の実験的な作品に挑戦した。「馬の足」（新潮大正十四年一月、二月）はその代表的な成果である。兄慎太郎の弟洋一に対する呼びかけ、「お前は何時でも小説なんぞ読んでゐるぢやないか？それなら、僕のやうな人間のある事も、すぐに理解出来さうなものだ。」（「二」）この兄弟のやり取りは、芥川龍之介の内面の対話である。後年、遺稿「暗中間答」（「文藝春秋」昭和二年九月）で「或声」「僕」の問答形式で芥川龍之介の分裂した精神構造として象徴的に記述される。兄の弟に語る呼びかけ「小説なんぞ読んでゐる」（「二」）の「小説」は、この場合明らかに芥川龍之介が親しんだ不条理文学を具体的に示している。さらに兄慎太郎が、弟洋一に語るこの言葉は、芥川龍之介が少年時代に実見した会話の焼き直しである。目の悪い浅川の叔母が、二階に登って来て洋一に語りかける場面に続く。「『私は少しお前に相談があるんだがね。』洋一は胸がどきりとした。」（「二」）の洋一の胸中その実態について考察する。

浅川の叔母の頼みというのは薄情な、事務的な看護婦を人情味のある別の看護婦に替える為の相談であった。洋一は、了解し従業員に看護婦会に電話するよう連絡する為に階下に下りる場面が、以下の記述である。「洋一は叔母のさき立つて、勢ひ好く梯子を走り下りた。『神山さん。ちよいと看護婦会へ電話をかけてくれ給へ。』（「二」）、もし叔母の頼みが洋一の予期していた深刻なそれであつたら「洋一は叔母の後から、物憂く梯子を下りた。」という記述になった筈である。それなら、洋一が危惧した「胸がどきりとした。」とい

う不安内容は、どのようなものだったのか。「『お母さんがどうかしたの?』』という洋一の発言が意味するように第一義的には、母の危篤の事態である。そして第二義的には、母の死亡によって生じる自分と兄の家庭内の地盤沈下、さらには先妻の縁者からの経済的な要求である。心配が、すべて杞憂である事が判明した結果の洋一の行動が、「叔母のさきに立つて、勢いきほひ好く梯子を走り下りた。」という行動の意味である。

3 (「三」)

洋一が、昼過ぎに茶の間を覗くと他家に嫁した義姉ぎしが居て父に財産分与を強請っている場面に遭遇する。隣室では、実母お律の苦痛の喘ぎが聞こえる状況での姉の懇願に洋一は苦痛を覚える。掛かりつけの戸沢とざは医師だけでなく、谷村博士にも来て貰うことにする。約束の三時を過ぎても現れない谷村博士を迎える為に洋一は、大通りまで迎えに出る。通りに佇む洋一に使い走りの店の店員が、遊び友達田村からの誘いと父の呼び出しを持って通りかかる。そこで洋一は、電報で呼び戻らされた兄慎太郎の人力車での帰宅途中に遭遇する。大通りから自宅までの短い兄弟のやり取りで、「お律と子等と」の主役は、洋一から慎太郎に移行する。別の言葉で言い換えれば、作中の語り手は洋一から慎太郎に移るのである。作品題名「お律と子等と」が生きてくる。つまり、母であるお律の死を廻って二人のお律の子供洋一、慎太郎の物語が語られるのである。作品構造の主役が、つまりは物語の語り手が弟から兄に譲渡される場面が、「お律と子等と」(「三」)後半に的確に書き込まれている。

洋一は兄を見上ながら、体中からだぢゅうの血が生き生きと、急に両頬へ上るのを感じた。(「三」)

瀕死の実母お律の状況を背景に弟の洋一は、不在の兄に全幅の信頼を寄せている。その信頼は、実母お律の死によって訪れるかも知れない自分の存在の不安、具体的には実家での自己の存在価値であった。兄の慎太郎は、行動で弟のこうした不安を打ち消すのである。

洋一が予期してゐなかつた、とは云へ無意識に求めてゐた或表情ひらめが閃いてゐた。洋一は兄の表情に愉快な当惑を感じながら、口早に切れ切

れな言葉を続けた。(「三」)

洋一は、実父賢造に財産分与をおねだりする義姉と父とのやり取りを聞いてきたばかりである。年少の自分に代わり、お律の子供として兄が実家に帰宅して采配を振る事を期待しそれを見込み薄の行為と見做していた事になる。兄の慎太郎が、お律とさらには実家を簡単に見捨てるのではないかと危惧していた訣である。弟洋一のこの心配は、兄の態度で美しく裏切られる、これが「兄の表情に愉快な当惑を感じながら」の内実である。

死に瀕した実母の枕元に駆けつける為に兄は、車夫に速やかな行動を促すと同時に彼の脳裏には、過ぎ去った列車の一挿話が脳裏を横切る。人は、速やかな行動に移行する瞬間それが緊急の事態であれば、それだけ意識は別の何かに囚われて肉体の行動と別に些少な過去の記憶の断片が、脳裏さえずを遮るものである。

それは隣に腰をかけた、血色いの好い田舎娘の肩を肩に感じながら、母の死目に会ふよりは、寧ろ死んだ後あとに行つた方が、悲しみが少いかも知れないなどと思ひふけ耽つてゐる彼だつた。しかも眼だけはその間も、レクラム版のゲエテの詩集へぼんやり落してゐる彼だつた。……(「三」)

実母の遺骸に死後に対面した方が、打撃が少ない。あるいは逆か、どうか判定できない。川端康成「十六歳の日記」では、唯一の肉親である祖父の死の床から遠ざかる少年の姿が記録されたが、祖父に対する激しい愛がそうさせた訣である。瀕死の母の身体が、横たわる枕辺に立つのに彼の視界に過ぎ去った列車内の残影が横切る。具体的には、肉体が微妙に接触を繰り返す「血色の好い田舎娘の肩」、でありその健康な娘の息吹から逃れようと独逸語の「ゲエテの詩集」へ意識的に回避行動を取る自分の姿が、脳裏を横切る。典型的な旧制高等学校の生徒の異性に対する、自己の性に対する回避行動である。文学素養を芥川龍之介文学で涵養された松本清張は、作中人物の述懐に芥川文学、芥川龍之介の視線が顔を出す。平凡な会社員が、愛の喪失体験の直後に非日常的な性経験を履行する時に呟く言葉、学生時代に夫の葬儀を取り仕切った未亡人が、喪服のまま夫の遺骸の前で不倫の饗宴に耽る外国小説を読み、その非現実

な事に呆れたが今自分は学生時代の自身の未熟を知ったと呟く場面である。

「兄さん。試験はまだ始らなかつた？」(中略)「明日からだ。(後文省略)」(「三」)

兄は、試験を受ける事を放棄して、つまり進級する事を諦めて実母お律の枕元に駆けつけた訣である。こうして作品の主演は、洋一から慎太郎に弟から兄に引き継がれる事になる。「慎太郎は弟を勉めたかつた。が、その心もちは口を出ると、何時か平凡な言葉に変わつてゐた。」(「三」)と云うのは、この間の事情を語っている。

4 (「四」)

谷村博士の診断を受けた一時間後、賢造、慎太郎それにお絹の夫の三人は、二階でお律の容態について具体的な診断結果を聞く事になる。掛かりつけの医師である戸沢は、微醺を帯びながら一週間のお律の病状報告を谷村博士に話す。

慎太郎には薄い博士の眉が、戸沢の処方を見た時、かすかに動いたのが気がかりだつた。(「四」)

戸沢の十二指腸の潰瘍という病状報告を是認しながら谷村博士の下した段は、腹膜炎である。谷村医師は、掛かりつけの戸沢の面子を潰さない範囲でお律の病状が最悪であると告げるのである。なす術のない病人を相手に老練な谷村医師は、時計を見ながら絶望的な状況からの離脱をする。かすかな救いを求めて再来疹を乞う戸沢に対して応答する。

「ええ、上る事は何時でも上りますが、—」(「四」)

谷村博士を見送りながら慎太郎は、誰よりも後に階下に降りながら全てが手遅れである事、実母の迫り来る死を実感する。

5 (「五」)

夜になって苦痛を覚えるお律は、慎太郎を枕元に呼びつけて母として、妻としての下町に生きる者の平凡な勤めを果たそうとする。兄の慎太郎に弟洋一を頼む事、さらにお守りを持っているので心強い、さらに幻聴を聞く場面と続く。実母のこの姿は、高等教育を受けている慎太郎を怯ませるに十分なものがあって、引き下がって一人寝に就

く彼にある種開放感を与える。「垂死の母を見て来た癖に、もう内心ははしやいでゐる彼自身の軽薄を憎みながら、……」(「五」)

小島政二郎は、前掲「芥川さんの『お律と子等』を評す」で前半、洋一を視点に描かれた箇所までは作品的な成功を収めている、後半慎太郎に視点移動してからの描写は描き足りないという。兄弟二人の幼児の記憶を描きながらその心理描写の過酷な現実が、現在の二人の生活に反映されていないと不満の意を漏らした。下町の中小経営者である父親の賢造の描き方は物足りないと言う。しかし、対人関係で四方八方に気を使う事で自己の個性を埋没させて生きる下町都会人の類型を示していると思う。小島政二郎のいうように久保田万太郎「朝顔」「ふゆぞら」「田原町」等は下町を描き、下町世界で充足している。「お律と子等」は、同じ下町を素材にし、小売商人を描きながらも心理描写にその特異性が見られる、しかし不十分で終わってしまったと小島政二郎は結論付けた。「稲妻や二尺七寸そりやアこそ抜いた」(「十千万堂」)という尾崎紅葉の句で批評を締めくくったのは小島政二郎流である。

6 (「六」)

瀕死の状態の母を階下において、その夜二階で寝に就いた慎太郎に幼児の回想の場面が訪れる。第一の回想は、慎太郎が義父に新しい帽子を買ってもらったことが原因で、姉のお絹との間に争いが起きる。下町の小売商人である賢造は、生活で身に着けた処世の才で義理の息子である慎太郎に気配りをしたわけである。このことが、実母を亡くし家庭内での孤立を余儀なくされたお絹の嫉妬心を煽ったのである。しかし、慎太郎には義父が息子である自分の気を引く為に贈り物をする意味もさらには、姉のお絹の立場も十分に忖度する事が出来る。

しかし頭の何処かには、実母のない姉の心もちが不思議な位鮮に映つてゐるやうな気がしながら。— (「六」)

つまり、慎太郎と姉のお絹は賢造の家庭内では同一の境遇であるという事である。作者はその事を十分書き込んでいる。「お律と子等」は、下町の小売商人の実態を描く事では久保田万太郎に

及ばないが、作品細部の書き込みは精緻である。父親に向かってのお絹の発言「(前文省略)私のお母さんは莫迦だつたんですから、一」(「六」)とあるようにお絹の家庭内での弱い立場と、不在の実母の存在を書き入れている。さらに慎太郎の実父の存在も書き漏らしていない。慎太郎の第二の回想である。

慎太郎は、小学校の頃に母に連れられて谷中の実父の墓参りをした経験を回想する。しかし、彼には実父の存在は、希薄で覚束ないものであった。慎太郎が、実父の墓参りを母に連れられて行った記憶に付随するのは、近くで子供たちが空気銃で小鳥を撃ったのを目撃したことである。

彼は顔を知らない父に、漠然とした親しみを感じてゐた。が、この^{おはれ}儂な石塔には、何の感情も起らないのだつた。(「六」)

死者の墓石の前で生者が、感慨を持つのは共に生きた時間と空間を共有した思い出であり、その記憶が、死者の記憶を墓石から呼び起こして来る。生前に共通の経験を持つ事になかった父子にとっては、墓石は石ころに過ぎない。共通する記憶の断片こそが家族の絆であるという知識を作者は、示した訣である。

幼児の回想に耽る慎太郎の横で父も睡眠を取ろうとするが、二度に亘って階下のお律から呼び出されて病床に行く。息子の慎太郎は、父を階下の病床に呼び戻す母の行為を一度は憐れみ、さらには常時父に手を取られていたいからではないかと忖度してみる。

7 (「七」)

翌日の朝早く、慎太郎一人を残して他の家族は全て居間を出て行ってしまふ。偶々^{たまたま}残された慎太郎は、急変したお律を一人で見取る事になる。小島政二郎は、「お律と子等と」に従来の芥川龍之介作品に見られる劇的な終結を期待した。しかし、佐々木雅發『「お律と子等と」私論』では、下町小売商人の後妻、お律の家族に対する献身の愛と日常の時間の中での絶命に積極的な意義を見出している。

しかし彼の^{まぶた}暈の裏には、やはりさまざま母の記憶が、乱雑に漂つて来勝ちだつた。その中には嬉しい記憶もあれば、寧ろ忌はしい記憶も

あつた。(中略)「みんなもう過ぎ去つた事だ。善くつても悪くつても仕方がない。」(「六」)

幻聴と意識の混濁と激しい痛みの中でお律は、慎太郎に次男洋一を頼み、さらには賢造には衣類の心配をしている。こうして母親として妻としての日常の勤めを果たしながら理性の混乱の内にお律は、慎太郎一人に抱き抱えられながら絶命する。前掲、佐々木雅發論文は不確かな家族構成の中、日常生活の勤めを意識混濁の内を果たそうとするお律の生と死にある種の意義を見出している。

むすび

「お律と子等と」は、作風としては「秋」の近代心理小説の流れを継承し、主題的には「捨子」の課題を発展させている。「秋」「お律と子等と」が発展、拡散すれば「菜穂子」になった筈であるという三島由紀夫の発言は肯定できる。それが達成出来なかったのは時代的な制約であったかも知れない。芥川龍之介の歴史小説は、鏤刻の文体の中に緊張感を漂わせ息苦しい緊迫感に迫る作品が多いが、「秋」「お律と子等と」にはこうした切迫感はなく、むしろ自然な流露感がある。不確実な人間関係、日常生活の繰り返しの断絶で「お律と子等と」は「菜穂子」より現代的な作品である。少なくとも「菜穂子」にはない、人生の断片の拡散、消滅で真実の人生に迫っているかも知れない。

II 「点鬼簿」

はしがき

「点鬼簿」(「改造」大正十五年十月)に記述されている四人の登場人物は、芥川龍之介の両親、姉そして自分である。三人はすでに物故者であり、残された生者である自分がある日谷中の墓地に墓参りをして自分一人死に遅れてしまったという感想を持つ。そして、生き残った自分は死者たちに親近感を持つ、「かげろふや塚より外に住むばかり」(「丈艸」)という蕉門十哲の句に寄り添う形で作品を終わる。丈艸に就いては、吉田精一「^{琉球全集}芥川龍之介全集」脚注に「尾張国犬山の土、致仕して山城深草に仮寓し芭蕉に師事。『かげろふや』の句は(『丈艸発句集』安永三年)下巻春之部にあり、『芭蕉翁の墳にまふで、我病身をお

もふ』の題がある。」、つまり蕉門十哲の一人が師の墓参をして死者に思いを馳せた境地に芥川龍之介は自己の心中を重ねた訣である。丈艸に就いては、「松尾雅秋編俳句辞典近世」（桜楓社）に拠れば、「篤実・謹厳ながらユーモアを忘れず、子供達にしかたばなし仕方話を語るなど酒脱な一面もあった。」、さらに「三歳の時生母を亡い、継母に仕えた。」とも紹介されている。これだけで蕉門十哲の一人である丈艸の師の芭蕉墓参の折の境地に自己の胸中を重ねた芥川龍之介の心中を想い図る事が出来る。「明治書院芥川龍之介事典」（「点鬼簿」）では、和田繁二郎は死を凝視する芥川龍之介の視点と作中記述されているギャグめいた表現との間に落差があり評価が定まらないとしている。

「歯車」に偶然再会した高等学校以来の旧友、応用科学の教授との会話が、記録されている。「君はちつとも書かないやうだね。『点鬼簿』と云ふのは讀みだけれども。……あれは君の自叙傳かい？」（中略）「僕もこの頃は不眠症だがね。」（四）という発言の主は、諸般の状況から判断するに広津和郎の可能性が高い。「点鬼簿」（改造 大正十五年十月）に最初に反応したのは、徳田秋声「十月の作品」（「時事新報」大正十五年十月九日）であり、近松秋江「旧痕」を例に出して「『点鬼簿』などの作品となると、作者が果してどれほどの芸術的感興をもつて筆を取つたものであるかを疑はざるを得ないのである。」と否定的な時評をした。これを読んだ広津和郎「文芸雑観」（「報知新聞」大正十五年十月十八～二十日）は、反駁文を寄せた。この広津和郎の一文に接した芥川龍之介は、直接書簡を寄せて感謝の意を示した「近来意気が振はないだけに感謝した。」（「広津和郎宛書簡」大正十五年十月十七日）、晩年の芥川龍之介は「MENSURA ZOILI」（「新思潮」大正六年一月）で「女の一生」を翻訳した広津和郎を揶揄したが、昔の敵讐に対しても媚を売る程に衰弱したという事である。「点鬼簿」発表半年後に、歌舞伎座の廊下で広津和郎に窮状を訴える芥川龍之介の姿を記録している「おお、君、俺はもうやりきれないんだ」（あの時代—芥川と宇野—「一」）。この広津和郎「同時代の作家たち」には、自身の不眠症が芥川龍之介を凌ぐ程であったという自身の告白もあり、「歯車」（「四」）の登

場人物が歌舞伎座で再会した広津和郎の可能性がある事を示唆している。最晩年の芥川龍之介は、佐藤春夫に近づきさらに敵讐であった広津和郎、宇野浩二に接近している。「文藝春秋」に拠る菊池寛、久米正雄等に対する失望、落胆がそうさせたと言える。

1（「一」）

「点鬼簿」で最初に取り上げられているのは、実母芥川ふくである。「新潮日本文学アルバム芥川龍之介」（「四頁」）に実母に抱かれた幼少の芥川龍之介の肖像画を掲げる。実母は、一瞥して後年の芥川龍之介の横顔を彷彿させる。肖像画の芥川ふくは、年齢的にも最晩年の芥川龍之介に近い存在である。実母芥川ふくの姉芥川ふきについては、前掲アルバム（「六頁」）に肖像画があるが、年を取っているので芥川龍之介との顔の輪郭を重ねる事が出来ない。しかし、芥川龍之介自身は、「家中で顔が一番私に似てゐるのもこの伯母なら、心もちの上で共通点の一番多いのもこの伯母です。」（「文学好きの家庭から」と言っている。

実母の不在が、芥川龍之介に与えた影響は深刻なものがある。実母芥川ふくが健在であったならば、芥川龍之介は別の人格になっていた可能性大である。健全な社会生活を全うし、頑強な精神を持つ代わりに一行の詩も残さなかった可能性がある。周辺の者達に見境なく愛を求める情緒不安定な揺れる精神構造は、実母芥川ふくの不在に由りもたらされた。（久米正雄）「芥川がじつによく出ているそうじゃないか。あの男のあのへんなところが……」（「わが文学半世紀」作者の言葉）という江口渙が、記録した芥川龍之介の挿話は実母不在の生い立ちを持つ者の情緒不安定を余す事無く描いた。幼児に実母を喪失した志賀直哉には、実父がさらに彼を慈しみ育て上げた祖父母の存在があった。

「『暗夜行路』を讀みはじめた。主人公の精神的闘争は一々僕には痛切だつた。」（「歯車」三）「暗の中を？—『暗夜行路』はかう云ふ僕には恐しい本に變りはじめた。」（「歯車」五）、後年松本清張は、志賀直哉に屈服する芥川龍之介の文学姿勢を嘲笑った。「『あざむら新生』讀後果たして『新生』はあつたであらうか？」（「侏儒の言葉」遺稿）さらには

「殊に『^{しんせい}新生』に至つては、一彼は『新生』の主人公ほど老獪な偽善者に出會つたことはなかつた。」（「或阿呆の一生」四十六）、志賀直哉と島崎藤村二人に対する関心は、性に纏わる肉親間の問題に帰着する。前者は肯定的にそして後者は、否定的に理解されている。そこに「点鬼簿」理解に鍵がありそうである。「点鬼簿」（「一」）冒頭は、「僕の母は^{きやうじん}狂人だつた。」という衝撃的な一文で始まる。この一文の意味するものは大きく、この一文を草して半年後に芥川龍之介は同文の遺書を書いている。

僕もあらゆる青年のやうにいろいろの夢を見たことがあつた。けれども今になつて見ると、畢竟気違ひの子だつたのであろう。（「遺書」）

ここに記述された夢とは、具体的には何だろう。狂人の母を持ったという動かしがたい事実を前に芥川龍之介が隠蔽したのは、自己の運命を天才主義に結びつけることである。こうした外界の事物を自己の運命に近づけ自己関係付け（「fehlerhafte Eigenbeziehung」）に類する行為の果てに、精神内部の操作に破綻が来たことを自覚したのが、前掲遺書の意味であろう。

僕はいつか^{せいまうき}西廂記を読み、^{どこうきでいしうみ}土口気泥臭味の語に出合つた時に忽ち僕の母の顔を、一瘦せ細つた横顔を思ひ出した。（「点鬼簿」一）

吉田精一篇「^{魂塚全集類聚}芥川龍之介全集」脚注は、「土口気泥臭味」について、「これと同一の語は『西廂記』に見えない。第四本第三折に、『土氣息泥滋味』（土のおい泥のあじ）とあるのがこれに近い、」と云う。つまり独特の臭気であるが、これについては後に次のように具体的に記述する。

彼の母も十年前には少しも彼等と變らなかつた。少しも、一彼は実際彼等の臭気に彼の母の臭気を感じた。（「或阿呆の一生」二）

宇野浩二が、発狂して斉藤茂吉の世話で王子能病院に入院させられた時に同伴した広津和郎に「もしあのままになつたとしても立派だよ。発狂は芸術家に取って恥ぢないからね。一字野もあれで行くところまで行つたという気がするよ」（広津和郎「あの時代」五）という感想を漏らした。実母の発狂後の無残な姿をその最後まで見続けて来た彼を追い詰めたのは、実母と同じ道を歩むかも知れないという精神分裂病に対する脅迫観

念である。「しかし彼は彼自身彼の病源を承知してゐた。」（「或阿呆の一生」四十一）というように実母の精神分裂病から派生した自己の遺伝による精神破壊である。同じ宿命を背負つた島崎藤村に対する近親憎悪が、「或阿呆の一生」（「四十六」）での「新生」読後感になった。

「暗夜行路」も「新生」も肉親間の不倫を主題に据えているが、前者は肯定的に把握され後者は厭われている。ここに芥川龍之介の私生活の秘密があり、「点鬼簿」解明の鍵があるように思う。考証的な事実によれば、藤村の父島崎正樹（「夜明け前」の青山半蔵）は狂死し、藤村の姉高瀬その（「家」のお種）も父と同じ道を辿っている。芥川龍之介「果たして『新生』はあつたであらうか？」という厳しい視線、弾効は「新生」の叔父岸本、姪節子に向けられているが、二人の間の不義の子供の側に立っているからではないか。これに反して「暗夜行路」の時任謙作に寄せる同調「主人公の精神的闘争は一々僕には痛切だつた。」は、自己の人生の苦痛の分身を主人公に見出したからである。

僕はこの主人公に比べると、どのくらい僕の阿呆だつたかを感じ、いつか涙を流してゐた。

同時に又涙は僕の気もちにいつか平和を興へてゐた。（「齒車」三）

荻久保泰幸『「点鬼簿」小考』に拠れば、「齒車」（僕）が読んだこの場面は「暗夜行路」（後編）第四の前半）、つまり主人公が自分の不在時の不義密通を妻から告白される場面である。しかし、前後の事情からこれは主人公が、自分が不義の子供であることを兄の書簡で知らされる場面ではなくてはならない。芥川龍之介は、芥川ふくが実母であり芥川ふきが自分の実母の姉であることを疑つたことはあるまい。前者は「気違ひの子」と云う自己認識で、後者は「家中で顔が一番私に似てゐる」という客観的認識においてである。問題は事実としての父親の存在ではなく、芥川龍之介が生前に新原敏三を実父として確信を持っていたかである。

僕は中学の三年生の時に僕の父と^{すまふ}相撲をとり、僕の得意の^{おほそとが}大外刈りを使つて見事に僕の父を投げ倒した。（「点鬼簿」三）

前掲荻久保泰幸論文に拠れば、この場面は「暗

夜行路」(「序詞」)に依拠している箇所である。主人公が、父に対して違和感を覚える前哨戦の場面である。

「点鬼簿」(「一」)は、実母を喪失する少年時代の生々しい記憶である。次姉久子と龍之介に人物画を描いてやるとそれらの人物は、狐の顔をしていた。これは終生河童の自画像を描き続けた芥川龍之介が成した虚構の場面であろう。実母の末期に駆けつける芥川龍之介の記憶に残る断片は、襟巻きに纏わる記憶の断片である。この場面「本所から芝まで駈けつけて行つた。」(「一」)は、本所区小泉町十五番地(現在の「墨田区東両国」)の芥川家から芝の新銭座(現在の「港区」)の新原家に人力車で駆けつけた龍之介の十一歳の時の実体験であろう。実母の死に目に会いに行く芥川龍之介の記憶は、襟巻きの些少な断片的記憶として残り、実母との死に目は滑稽感を伴うものだった。「点鬼簿」(「一」)の記述は、実母との死に際の別れの意味を、芥川龍之介のその後の人生の過酷を語る。この箇所は、囚らずも後年の実存主義文学「異邦人」との偶然的類似を見せている。最晩年、芥川龍之介は義母で苦勞する習作を読んだ折に自分に師事する青年の虚構箇所を指摘している。「僕は時々幻のやうに僕の母とも姉ともつかない四十恰好の女人が一人、どこかから僕の一生を見守つてゐるやうに感じてゐる。」(「二」)という最晩年の境地から類推されたのである。

「点鬼簿」の一ヶ月前に発表の「春の夜」(「文藝春秋」大正十五年九月)では、幻視体験の気配を作中に記述した。肉体から離脱した魂が背後に忍び入る気配、「Nさんはかうい言ひかけながら、後ろが気になつてならなかつた。」(「春の夜」)とある。

2 (「二」)

「点鬼簿」(「二」)で扱われているのは、芥川龍之介が生まれる一年前に物故した姉新原初である。芥川龍之介より七歳年上、芥川ふくの最初の子供である。「点鬼簿」執筆時存命なら四十二歳、芥川ふくは龍之介誕生時に三十三歳で死亡時には四十三歳である。「僕の母とも姉ともつかない四十恰好の女人」という芥川龍之介の認識は、誤つてはいない。

これは珈琲や煙草に疲れた僕の神経の仕業であらうか?それとも又何かの機会に実在の世界へも面おかけを見せる超自然の力の仕業であらうか? (「点鬼簿」二)

明らかに神秘的心靈現象を自覚している芥川龍之介の横顔がある。最晩年の芥川龍之介にとって養母芥川龍之介ふきは、束縛の対象であり妻である芥川文は幼妻で頼りならない。時間と空間とをを超えて物故した母と姉に最晩年の芥川龍之介は、救いを求めたということである。同時期神を求める悲痛な告白も遺稿として残しているが、その依拠したところは不明である。「神の求め給ふ供物は碎けたる靈魂なり。神よ。汝は碎けたる悔いし心を軽しめ給はざるべし。」(「断片」二)。「吾妻鏡」は、源実朝が鎌倉鶴岡八幡宮での右大臣拝賀の式に望む朝に源氏の将兵の心靈を目撃する記載があったやうに記憶するが、同趣旨の心靈現象を芥川龍之介も記録に残した。こうした心靈を実感すれば、それは妄想知覚(「Wahn-Wahrnehmung」)であり発展すれば、精神分裂病である。

僕は風呂へはひりに行つた。彼は午後十一時だつた。風呂場の流しには青年が一人、手拭を使はずに顔を洗つてゐた。それは毛を抜いた鷄の様に瘦せ衰へた青年だつた。僕は急に不快になり、僕の部屋へ引返した。すると僕の部屋の中に腹巻が一つぬいであつた。僕は驚いて帯をといて見たら、やはり僕の腹巻だつた。

「鵠沼雑記」(以上東屋にゐるうち)、この一文は「点鬼簿」同時期執筆の遺稿であるが、時間と空間を越えて現在の自分が、過去の自己に邂逅する場面を記録したものである。この異常知覚が、肥大するとドッペル・ゲンゲル(「Doppelgaenger」)現象を目撃することになる。

3 (「三」)

「点鬼簿」(「三」)は、芥川龍之介の海軍機関学校退職直前スペイン風邪流行の為に東京病院で死亡した実父新原敏三との死別の状況を記述する。しかし、その別離の記載事項は深刻なものではない。それは普段実父新原敏三と疎遠であつたということ以外に、英語教師の職を擲ち直ちに文筆生活に入る目安が立つたこと、師の漱石に倣う形で大阪毎日新聞社社友となつて生活の心配をしなく

ても執筆に専念できる目安が立ったことなどが理由に考えられる。

僕の父は又短気だつたから、度々誰とでも喧嘩をした。「点鬼簿」三)

以下の実父を相手に相撲で三度に亘って競い合う場面は、荻久保泰幸『『点鬼簿』小考』の指摘に拠れば、「暗夜行路」(「序詞」)の主人公の少年時代の挿話である。「暗夜行路」(「序詞」)の主人公少年時代の記憶は、彼が父の子供でなくて母と祖父との間の不倫の子供である宿命を背負う為の複線である。「点鬼簿」(「三」)を執筆する芥川龍之介が、構成上伏線として「暗夜行路」(「序詞」)のこの挿話を使ったのであるなら、新原敏三が実父でないと芥川龍之介が意識していた訣である。「点鬼簿」(「三」)の実父新原敏三の記述には、深刻さの側面はなくて記述は、淡々とした筆致である。

「一半は維新の革命に参した長州人の血もまじつてゐる。」(未定稿「紫山」という認識や「本是山中人」(「禅林句集」)を愛唱したことなどから、生前の芥川龍之介は新原敏三を実父として疑いを持たなかったかも知れない。すると芥川龍之介という存在は、完全に新原敏三、芥川ふくという一組の夫婦さらに両家の家族の中で浮いた存在である。あるいは実母芥川ふくに代わり芥川龍之介を育て上げた芥川ふきの養育が、特殊なそれであったことを証明しているかも知れない。沖本常吉「芥川龍之介以前^{本は山中人}」(「東洋図書出版」)には、新原敏三の子孫の家系に芥川龍之介の風貌類似の青年の肖像画を掲げている。芥川龍之介自殺の最大動機が発狂に対する恐怖であり、その根源は実母芥川ふくの精神分裂病で理性喪失の実態を目撃した少年時の記憶である。宇野浩二の発狂の惨状を目撃したことが自殺決行の起爆剤になった。

生前の芥川龍之介が、自己の存在を伯母芥川ふきによる献身的な特殊教育の結果と認識していた可能性はある。「麦の中に芥子の花の咲いたのは畢に偶然と云ふ外はない。我々の一生を支配する力はやはりそこにも動いてゐるのである。」(「西方の人」五)。あるいは小穴隆一の憶測するように実母芥川ふくの不倫の子供の可能性としての認識を持っていたことも推測できる。「最後に一或^{つひ}は人気のない夜中に突然彼女を驚かした聖霊の姿

も思ひ出したかも知れない。(中略)しかし^{だいく}大工の妻だつたマリアはこの時も薄暗い『涙の谷』に向かひ合はなければならなかつたであらう。」(「續西方の人」八)。

聖母マリアが、聖霊により身ごもった瞬間にアクセントを置く記述の背後に私自身は、作者芥川龍之介の実母芥川ふくに寄せる切実な思いを感觸として覚える。

4 (「四」)

「僕は^{ことし}今年の三月の半ばに(中略)久しぶりに妻と墓参りをした。」(「点鬼簿」四)。この墓参の日時は、「大正十五年三月十六日」の実父新原敏三の命日の墓参であろう。実母、^{じっぼ}実姉そして^{じっし}実父の死を語りながら最後に丈艸の句で作品を締めくくり自己の生の終焉を予測した形になった。後年、広津和郎は「あれを読んでみると、死ぬと思つたな。」(「新潮」昭和十年七月)と発言し、それに対して宇野浩二は、「それから、私は、『点鬼簿』を読んだ時、『死ぬな、』などとも、思はなかつた。」(「芥川龍之介」二十一)という感想を述べている。「芭蕉翁^{つか}の墳にまふで、我病気をおもふ」(「丈艸発句集」)の一文を添えた句「かげろふや塚より外に住むばかり」で作品を締めくくる背後には、丈艸に仮託して漱石の墓に詣でて死に遅れた自分の人生を嘆きたい自己の心情があるやも知れない。

『續晋明集』読後」(「東京日日新聞」大正十三年七月十四日)でも丈艸のこの句を推奨するも句は「陽炎や墓より外にすむばかり」になっている。

芭蕉^{いはつ}の衣鉢を伝へたかと言えば恐らくは内藤丈艸^{じょうそう}であらう。少なくとも発句は蕉門中、誰もこの俳諧の新初知ほど芭蕉の寂を捉へたものはない。(「澄江堂雑記」二十八)

俳聖芭蕉の真髓を理解しその精神を追隨する者、丈艸という把握において自分の文学上の位置を漱石に継ぐ者として認識していたことが分かる。

むすび

僕は納棺を終つた後^{のち}にも時々泣かずにはゐられなかつた。(中略)「ほんたうに御感心でございますね」(「点鬼簿」一)

これは、前後の文脈から察するに文脈が乱れて

いて本来は「僕は納棺を終つた後にも泣かずに通した。」でなければならぬ訣で、才人芥川龍之介の文章上の瑕瑾かきんではないだろうか。「点鬼簿」は「尾生の信」と同じく形式美の美しさで際立っている。荻久保泰幸『『点鬼簿』小考』の指摘に拠れば、「点鬼簿」(「一」「三」)は、その各構成が「①作者の感情②挿話③臨終④葬儀」の順に均一な構成美を成している。ここでも三島由紀夫の「トロッコ」評が生きている。「型を意識せずには、作品の質を上げることのできなかつた作家である。」

「点鬼簿」は、明らかに芥川龍之介による藤村「新生」に対する意識的な挑戦の意味合いがある。「『新生』讀後」(「侏儒の言葉」)は、藤村「新生」の告白手法が芥川龍之介の考える告白手法「告白」(「侏儒の言葉」)との間に大きな齟齬そごがあったことを窺うかがわせる。「『もつと己おのの生活を書け、もつと大胆だいだんに告白しろ』(中略)誰が御苦労にも恥ぢ入りたいことを告白小説などに作るものか。」(『澄江堂雜記』十六)、これは明らかに藤村「新生」に対する世評に対する赤裸々な反感を示した言葉である。「点鬼簿」は、告白手法に拠りながらその意識的な構成美、形式美により「新生」に対する芥川龍之介流の挑戦行為と見做し得る、その目論見は成功したと言える。

III 「玄鶴山房」

はしがき

「玄鶴山房」(「中央公論」昭和二年一月、二月)の素材提供者は看護婦からの聞き書きであると作者が明らかにしている。「お褒めに預つて難有い。あの話は『春の夜』と一しよに或看護婦に聞いた話だ。」(「宇野浩二宛書簡」昭和二年一月三十日)とある。後年宇野浩二「芥川龍之介」(「中公文庫」昭和五十年八月)では、「玄鶴山房」については批判的であるので、これは「玄鶴山房」(「中央公論」昭和二年一月)を讀んでの感想である。つまり「玄鶴山房」(「一」「二」)を雑誌で讀んだ宇野浩二が、書簡かあるいは直接に読後感を芥川龍之介に示した返事が、「お褒めに預つて難有い」の意味である。ちなみに「玄鶴山房」(「一」「二」)発表直後の「前編創作合評」(一月の創作)で問題にされている芥川龍之介作品は、「彼」(「女性」

昭和二年一月)「彼第二」(「新潮」昭和二年一月)「玄鶴山房」(「中央公論」昭和二年一月)「貝殻」(「文藝春秋」昭和二年一月)等であるが、「玄鶴山房」についての好意的な評価は、細木克三「(前文省略)『中央公論』でしたか短いもの、あれはいいですね。」徳田秋声「あゝ云ふものは面白い。(後文省略)」というやり取りで、宇野浩二は「玄鶴山房」については発言していない。後年、宇野浩二「芥川龍之介」(「二十」)では、「玄鶴山房」(「中央公論」昭和二年二月)の完結後に宇野浩二の自宅に遊びに来た芥川龍之介に「あれは、実にうまいと思つて、感心したが、ずるぶん気もちの悪い小説だね、僕は、あんな気もちの悪い陰気な小説はきらいだ、」と読後感を述べた事になっている。

「玄鶴山房」の素材提供者である看護婦は、芥川文「道徳芥川龍之介」(三十一)に拠れば、義弟塚本八洲の看護婦である。鶴沼の東屋旅館滞在中に(「大正十五年四月二十三日」から一ヵ年ほどは、田端から鶴沼に生活の拠点を移している)、芥川文は一日だけ(「大正十五年五月五日」)同伴の三男也寸志の初節句の為、田端に帰京した。腸を病む芥川龍之介の世話を力石平蔵(「トロッコ」の素材提供者)に依頼しての帰京であるが、鶴沼帰宅後は、芥川龍之介は大腸カタルになり、夫人の母親の好意で義弟塚本八洲の看護婦が芥川龍之介の世話をしていた訣である。この間、義弟塚本八洲の看護婦からの聞き書きが「春の夜」(「文藝春秋」大正十五年九月)と「玄鶴山房」になったのである。「弟はこの看護婦さんに大変好意を、或いは好意以上のものを持っていたようです。」(「道徳芥川龍之介」三十一)とあるように善意の人であるようだが、作品内部では「甲野はこの声を聞いた時、澄み渡つた鏡に向つたまま、始めてにやりと冷笑を洩らした。それからさも驚いたやうに『はい唯今』と返事をした。」(「玄鶴山房」四)というように悪意の人に変えられている。これについては、数ヵ月後に新潟での座談会(「昭和二年五月二十三日」)で芥川龍之介自身が、「『玄鶴山房』は看護婦に聞いた話です。『春の夜』もさうです。『玄鶴山房』であんなに悪く書いて了つたので何處かで恨んでゐるでせう。」(葛巻義敏編「芥川龍之介未定稿集」談話)と語っている。「玄

鶴山房」の看護婦甲野が、素材提供の实在の看護婦の実像とはかけ離れた人物像であることは、塚本八洲没（昭和十九年六月十日）後、芥川文が弟の墓参に行くとき下谷に住むこの看護婦からの花が生けられていたことから伺える。

善意の人を悪意の人に変貌させるのが、芥川龍之介文学の特色である。こうした芥川龍之介文学の傾向は、芥川龍之介自身が善意の人でありながら個人的には家族愛が希薄な実生活の反映にある。家族愛の希薄な実情が、生前の彼の他者に対する無限の愛を求める行為に繋がったと思える。これから「玄鶴山房」作品論を論述する上で問題にし、言及することになる青野季吉は、生前一度も面識を持つことのなかった芥川龍之介から書簡を貰って途惑った旨の回想文を残している。

かつて、些少の個人的な交渉もなかった芥川氏は、死の三ヶ月前に突然に私に手紙を寄せられた。こういう風なこだわりのないことは、室生犀星氏の芥川龍之介論で見ると、氏の天質であつたらしいが、私はちょっと面喰った。（「芥川龍之介氏に聯関して」昭和二年九月）

一面識のない青野季吉に何故芥川龍之介が直接書簡を贈ったかは、「玄鶴山房」発表後一ヵ月後の「新編創作合評」（「二月の創作」昭和二年三月）に訣がある。問題の発言は、青野季吉と金子洋文との間で取り交わされたやり取りである。青野季吉「外のものを持つて来ずに、リープクネヒトを持つて来たのは意味があると思ふ。」金子洋文「好い加減なもんさ（笑ふ）『苦楽』なら問題ならず。リープクネヒトだと問題にするのはおかしいよ。あの場面はリープクネヒトでも、『苦楽』でも同じだよ。」という発言である。この「新編創作合評」で「玄鶴山房」を論じている評者は、いずれも左翼陣営の面々であるが、「玄鶴山房」（「一」～「六」）の構成において「玄鶴山房」（「六」）のみは別の視点からの読みを要求するという作者による自作自註を遺した意味で青野季吉の発言は、重要である。「わたしは玄鶴山房の悲劇を最後に山房以外の世界へ觸れさせたい気持ちを持つてみました。」（「青野季吉宛書簡」昭和二年三月六日）、多くの社会主義傾向の面々の中で「玄鶴山房」（「六」）の場面展開に注目して「リープクネヒトを持つて来たのは意味があると思ふ。」と発言し

た青野季吉の着眼に敬服して、未知の反対陣営の者に書簡を送った訣である。

「人生は多少の歓喜を除けば、多大の苦痛を與へるものと思つてゐます。」（「青野季吉宛書簡」）という発言に続いて芥川龍之介は、アナトール・フランスを例に社会主義への期待を言及した。この芥川龍之介発言は、作品の基本的構造を作者自ら解説して見せたものと理解できる。「玄鶴山房」（「一」～「五」）は、実人生の多少の歓喜を伴う甚大なる苦痛を記述したものであり、「玄鶴山房」（「六」）に地獄図からの救いを見出そうとしたと言える。つまり、芥川龍之介は理論としての社会主義に現状脱却の夢を託した訣である。社会主義の現実を知らずに理論に期待を寄せたのは芥川龍之介の限界であり、同時に幸せでもある。「玄鶴山房」（「六」）で来るべき共産革命に救いを求め、宗教的救済を希求したと言える。

塚本八洲の看護婦からの聞き書きから生まれた二つの作品「春の夜」（「文藝春秋」大正十五年九月）「玄鶴山房」の二作品には、結核の重症患者として横たわる義弟塚本八洲の実像の反映がある。芥川文夫人の実弟、塚本八洲は第一高等学校の寄宿舎生活で結核に罹患し、重症の結核患者として病み続け、四十二歳（「昭和十九年」）で亡くなった。

「春の夜」「玄鶴山房」の二作は、芥川龍之介が鶴沼の東屋旅館、東屋の貸別荘「イの四号」での療養生活の中から生まれ出た作品である。その状況については芥川龍之介自身が次のように説明している。「唯今弟についてゐる看護婦について貰らひ、やつとパンや半熟の卵にありついた次第、下痢のとまり次第歸京したい。一人で茫漠の海景を見ながら横になつてゐるのは實に寂しい。」（「小穴隆一宛書簡」大正十五年六月二十日）

芥川龍之介が、三男也寸志を連れた妻文と共に鶴沼の東屋旅館に滞在したのは、義弟塚本八洲の看病の為に義母塚本鈴が鶴沼に滞在していたからである。芥川龍之介の義弟塚本八洲は、芥川龍之介より十歳年少で第一高等学校入学後に寄宿舎で発病せずに学窓を終えたら物心両面で晩年の芥川龍之介を支えたであろう。人間運命は神をも知らないが、実弟の罹患の運命に対する芥川文の記述には、痛恨の恨みがある。「私の弟は一高に入学

して寮生活をしておりましたが、たまたま同室に、相当重症の結核を患った人がありました。弟は大変健康な体でしたが、毎日の寮生活の間に、少しずつ感染していったようです。」（『追想芥川龍之介』（三十一））

塚本八洲の看護婦からの聞き書きに依拠する二作品「春の夜」「玄鶴山房」の内、前者は比較的装飾が少なくて義弟とそれを看病する看護婦の直接の投影が見られる。「僕は当時僕の弟の転地先の宿屋の二階に大腸カタルカタルを起して横になつてゐた。下痢は一週間たつてもとまる気色は無い。そこで元来は弟の為にそこに来てゐたNさんに厄介をかけることになつたのである。」（「春の夜」）、冒頭のこの一文は、「主人はその間に大腸カタルになつてしまつていました。」（『追想芥川龍之介』三十一）という芥川文の回想と重なる。さらに「春の夜」の作品構図において看護婦の語る家族構成は、そのまま塚本八洲を看病する芥川文夫人の実家、家族構成の焼き直しである。「野田と云ふ家には男主人はゐない。切り髪にした女隠居が一人、嫁入り前の娘が一人、その又娘の弟が一人、一あとは女中のゐるばかりである。」（「春の夜」）。肺結核に罹患したこの息子に母親が語る、作中の発言「あたしはそんな意気地なしに育てた覚えはないんだがね。」（「春の夜」）は、鶴沼の東屋旅館にさらに東屋の貸し別荘に滞在中、芥川龍之介自身が妻の実家で仄聞した塚本鈴の発言の可能性がある。芥川文の実母、塚本鈴の夫は日露戦争で第一艦隊参謀として戦死している。戦争未亡人として生きた鈴は息子の塚本八洲より、六年早く昭和十三年に亡くなつてゐる。

二十一になる清太郎は滅多に口答えもしたこともない。唯仰向けになつたまま、大抵はぢつと目を閉じてゐる。その又顔も透きとほるやうに白い。Nさんは氷嚢を取り替へながら、時々その頬のあたりに庭一ぱいの木賊とくさの影が映るやうに感じたと云ふことである。（「春の夜」）

病床に横たわる清太郎の頬に庭の木賊の影の映るのを感じたのは、看護婦に仮託された芥川龍之介自身の経験でなくてはならない。相手は、義弟塚本八洲であるが、この場面は「春の夜」の作品終末部で繰り返される。「氷嚢をお取り替へ致します。」（「春の夜」）という看護婦の発言を引用

して宇野浩二は、「このぞオツとするやうな冷たさは、後の『玄鶴山房』に、通じるものである。」（『芥川龍之介』二十三）と批評した。

「春の夜」終結部での芥川龍之介作品定型の締め括りのやり取り「清太郎？一ですね。あなたはその人が好きだつたんでせう？」「ええ、好きでございました。」（「春の夜」）という最後のやり取りを宇野浩二は、「索然とした、逸はくらかされたやうな気がした。」（『芥川龍之介』二十）と言っているが、これも塚本八洲没後命日を忘れずに墓参を欠かさない看護婦の実像と重なる。「弟はこの看護婦さんに大変好意を、或いは好意以上のものを持っていたようです。」（『追想芥川龍之介』三十一）と芥川文により回想される。「何でも言ふなりになるばかりか、Nさんにもものを言ふ時には顔を赤めたりする位である。」（中略）「二十一なる清太郎」（「春の夜」）という作品中の記述は、『追想芥川龍之介』（三十一）で回想された義弟塚本八洲の実像に重なる。

「春の夜」が、芥川龍之介作品として特筆すべき箇所は、看護婦のNさんが経験するドッペル・ゲンゲル（「Doppelgaenger」）現象である。氷を買う為に外出したNさんは、清太郎に似た少年に抱きつかれて小銭をせびられる。清太郎の分身と外出先で遭遇したNさんは、清太郎の死を予想したが彼は相変わらず離れで静に寝ていた。「清太郎はそこにゐないかも知れない。少なくとも死んでゐるのではないか？」（中略）「Nさんはかう言ひかけながら、後ろが気になつてならなかつた。」（「春の夜」）、作中での神秘的傾向はこの時期の芥川龍之介の作品傾向を象徴している。宇野浩二は、「春の夜」と「玄鶴山房」とは、最初同一素材から構成された作品ではないかという見解を述べた。しかし、両作品は素材が同じでも作品傾向を異にしている。前者は、この時期芥川龍之介が示した神秘的現象に対する執着を示したものであり、後者は社会主義に救いを求めた作品である。

「春の夜」の冒頭が神秘的傾向を示したが、終結は従来の芥川龍之介作品と同じく一種の話の落ちで終わった事に宇野浩二は、「索然とした、逸はくらかされたやうな気がした。」（『芥川龍之介』二十）と意見を述べたのである。最初、宇野浩二が一読して「これはいかん、」と感想を抱いた「春

の夜」の冒頭箇所というのは、この時期芥川龍之介が集中して書き続けていた一連の神秘的作品の繰り返しと想ったからである。「Nさんはこの家へ行つた時、何か妙に気の滅入るのを感じた。(中略)けれども又一つには四畳半の離れの抱へこんだ、飛び石一つ打つてない庭に木賊ばかり茂つてゐた為である。」「春の夜」というのが宇野浩二の注目した冒頭である。作品冒頭の一文は、同時期発表の「悠々荘」(「サンデー毎日」昭和二年一月)の冒頭一文との重複を見せている。これらの一連の冒頭文は、ポオ「アッシャー家の崩壊」からの影響があるというのが宇野浩二の意見である。

茅葺き屋根の西洋館はひつそりと硝子窓を鎖してゐた。(中略)しかし又その外にも荒廃を極めたあたりの景色に一伸び放題伸びた庭芝や水の干上つた古池に風情の多いためもない譯ではなかつた。(「悠々荘」)

平岡敏夫「玄鶴山房」論では、「悠々荘」「玄鶴山房」の先駆を成すのが、「わが散文詩」(「玄関」大正十一年十一月)であると指摘し説明している。

「わたしは夜寒の裏通りに、あかあかと障子へ火の映つた、或家の玄関を知つてゐる。(中略)去年の夏、其処にあつた老人の下駄は何処へ行つたか?」(「わが散文詩」)

この作品は、明らかに「玄鶴山房」の素描の趣がある。「玄関」と「悠々荘」の二作品が統合して客観小説「玄鶴山房」が生まれたと言える。これらの一連の創作行為は、芥川龍之介自身の自殺に向けての精神的な準備の為に成された。一年前にあつた「老人の下駄は何処へ行つたか?」(「玄関」)は、老人の不在を直接的には死を予想させる設定である。そして「悠々荘」は、病没した住民の不在を主張する廃墟、廃園の名前が悠々荘である。

「何といつたつけ、この家の名は?」(中略)「悠々荘?」「うん、悠々荘。」僕等三人は暫くの間、何の言葉も交さずに茫然と玄関に佇んでゐた。伸び放題伸びた庭芝だの干上つた古池だのを眺めながら。(「悠々荘」)

この作品に込めた芥川龍之介の意図は、明瞭である。ポオ「アッシャー家の崩壊」に挑戦した「悠々荘」の意図は、作者によるアイロニーつま

りは皮肉、逆説である。こうした傾向は、芥川龍之介生来のものであって「玄鶴山房」でも生かされている。「玄鶴山房」(「三」)で愛人お芳、文太郎の母子が登場するが、それ以前に「玄鶴山房—玄鶴と云ふのは何だらう?」(中略)「何だかな、まさか厳格と云ふ洒落でもあるまい。」「(玄鶴山房)一」という一文がある。さらに「彼の告別式は盛大(!)だつた。」「(玄鶴山房)六」という作品末尾の一文も写実小説であるのなら感嘆符でなくて、疑問符「彼の告別式は盛大(?)だつた。」でなくてはならない。芥川龍之介の三中時代の物故した旧友、能勢五十雄を素描した作品「父」(「新思潮」大正五年五月)でも友人の尻馬に乗って自分を駅舎に見送りに来た実父を嘲笑した旧友の葬儀で自分、芥川龍之介は「君、父母に孝に」(「父」という悼辞を読んだ。さらに漱石臨終の場の再現を目論んだ「枯野抄」(「新小説」大正七年十月)では、作品末尾の一文は、「かうして、古今に倫を絶した俳諧の大宗匠、芭松庵松尾桃青は、『悲歎かぎりなき』門弟たちに囲まれた儘、溘然として厲穢に就いたのである。」「(枯野抄)」。この作品については、宇野浩二の善意の人が一人も存在しなくて悪意の人々ばかりの作品という批評が有名である。悪意の弟子たちに見守られて絶命する芭蕉庵松尾桃青ならぬ漱石臨終の場を「悲歎かぎりなき」と表現したのは、芥川龍之介の個性である。

「春の夜」に顕著に見られるのは、作中のオカルト思考である。この時期の一連の著作の集大成である「玄鶴山房」でこうした側面は希薄であるが、死後を意識し始めた芥川龍之介には、こうした幻覚症状が頻繁に見られる。「死後」(「改造」大正十四年九月)では、自分が死んだ後に再婚した妻と言葉を交わす場面を記述して、芥川龍之介のこの時期の関心の在処を示している。死後の自宅「櫛部寓」(「櫛部は姓。寓は仮住まい。櫛は奇に通じ、靈的な意をおびる。」琉球全集新訳脚注)という表札を潜り、再婚した妻と邂逅する。再婚相手の不適切な人格である事を互いに確認した旧夫婦、芥川龍之介と文夫人との間で取り交わされる会話は、現実感を持ち奇妙な不安を与える。「妻は驚いたやうに僕の顔を見上げた。その目はいつも叱られる時にする、途方に暮れた表情をしてゐた。

(中略)『何と言ふ馬鹿だ！それぢや死んだつて死に切れるものか。』(「死後」)

「春の夜」で見られるオカルト現象、看護婦Nさんの意識「清太郎はそこにゐないかも知れない。少くとも死んでゐるのではないか？」(「春の夜」)は、病跡學上ドッペル・ゲンゲル(「Doppelgaenger」)現象である。こうした一連の病跡(「pathographie」)現象を作品中に形象化した結果、「点鬼簿」(「改造」大正十五年十月)が執筆される。「点鬼簿」(「一」)で実母ふくを「点鬼簿」(「二」)で姉初を、さらに「点鬼簿」(「三」)で父新原敏三を記述し「点鬼簿」(「四」)を自己の人生の予兆で閉じた。「かげろふや塚より外に住むばかり」(「凡兆」)の句で自らの人生の行く末を暗示させた。

「玄鶴山房」(「中央公論」昭和二年一月)は、「彼」(「女性」)「彼第二」(「新潮」)「悠々荘」(「サンデー毎日」)「貝殻」(「文藝春秋」)等の作品と同時期に発表された。その為に作者同席の「新潮創作合評」(「一月の創作」)で同列に論じられている。「創作合評」出席者は、中村武羅夫・芥川龍之介・堀木克三・徳田秋声・久保田万太郎・宇野浩二・近松秋江・藤森成吉の面々である。「玄鶴山房」については、堀木克三、徳田秋声が認めている。久保田万太郎の「彼第二」を推挙する意見に対して、芥川龍之介は「彼」の方に自信を示している。「貝殻」については、古い手帳からの転載、備忘録であって作者自身が作品としての価値を認めていない。「彼」「彼第二」については、「(芥川龍之介)『憂鬱にはならないですか。』(徳田秋声)『憂鬱にはならない。』」というやり取りがあり、「藪の中」のような作品は、今の自分は書きたくないという芥川龍之介の感想の記載がある。

1 (「一」)

「玄鶴山房」には、この時期の芥川龍之介作品が持つオカルト思考が見られない。その意味では、最後の客観小説として理解し得る。「『玄鶴』と云へば、『黒色の鶴』のことだが、黒色の鶴などといふものがあるのかな」(「芥川龍之介」二十三)と言うのが小説題名に寄せた宇野浩二の感想である。しかし、総体として逆説とアイロニーに満ちていることは、「玄鶴山房」(「一」)においても十

二分に書き込んである。

堀越玄鶴は画家としても多少は知られてゐた。

しかし資産を作つたのはゴム印の特許を受けた為だつた。(「玄鶴山房」一)

最初に問題にすべきは「ゴム印の特許」で財産を作り、土地運用で資産を作つたという人物造型である。「玄鶴山房」という題名に寄せた宇野浩二の発言ではないが、「ゴム印の特許」などという知的所有権があるのかな、と言うのが素朴な最初の疑問である。次に問題にするのは「画家としても多少は知られてゐた」という一文であるが、これがアイロニーである事は二人の画学生のやり取りから知る事が出来る。「玄鶴山房—玄鶴と云ふのは何だらう?」「何だかな、まさか厳格と云ふ洒落でもあるまい。」、二人の画学生は、画家としての玄鶴の存在を知らない。さらに「玄鶴山房」(「二」～「六」)で展開されるお芳—文太郎の存在に対する作品冒頭での作品内部の人物構成に対する作者の揶揄でなければならない。

彼等は二人とも笑ひながら、気軽にこの家の前を通つて行つた。そのあとには唯凍て切つた道に彼等のどちらかが捨てて行つた「ゴールデン・バット」の吸ひ殻が一本、かすかに青い一すぢの煙を細ぼそと立ててゐるばかりだつた。(「玄鶴山房」一)

この一文を「中央公論」で初めて読んだ時の素朴な感想を宇野浩二が書き残した。「ふん、『青い一すぢの煙を細ぼそ』カ、あひかはらず遣つてるな、」(「芥川龍之介」二十三)と言うのがそれである。しかし、完結した「玄鶴山房」を読んだ後の感想は、「これは、うまい、」という読後感に変わっている。つまり、「玄鶴山房」作品構造の意識的造型に心打たれたということだ。実人生を虚偽、心労、虚飾の中で生きた者が、人生の終末において一時の安らぎを得ることなく精神的、肉体的苦悶の果てに絶命する物語を作者の側の個人的事情を記述することなく、客観小説に仕立て上げた芥川龍之介の作家手腕に脱帽した訣である。「悠々荘」と「玄鶴山房」は、前者が小品で軽く後者が小説で念の入つたものであるが、似ているので看護婦に聞いた話を別々の二つの作品に仕立てたのではないかという感想を持ったというのが、宇野浩二の第一印象である。前者には陰鬱の中に

憂愁があるが、後者には閉塞感に救いはない。「玄鶴山房」(「六」)でリープクネヒトを出して社会革命に救いを求めたのは、革命の実態を知りえぬ世代の幻想である。一種の宗教的な救済を求めた行為と看做すことができる。

宇野浩二「芥川龍之介」(「二十」～「二十三」)には、頻繁に「玄鶴山房」への言及があるが、それには理由があつて鶴沼東屋旅館の貸別荘「イの四号」滞在中の芥川龍之介を宇野浩二が訪ねているからである。「玄鶴山房」(「一」「二」)執筆中の現場を宇野浩二は、目撃している訣である。「中央公論は前後だけ出来て中間出来ず、とうとう二月に出すことに相成り、」(「斉藤茂吉宛書簡」大正十五年十二月十九日)、つまり「玄鶴山房」(「一」「二」「六」)は、鶴沼滞在中に執筆されて残りの客観小説となり得る「玄鶴山房」(「三」「四」「五」)は、東京田端で脱稿された(「玄鶴山房」脱稿は、宮坂覚編纂年譜に拠れば、昭和二年一月十九日である)。

自己の死後を意識する芥川龍之介にとって田端の自宅での私生活上の劇は、客観小説として定着させずには居られない一つの現実であった筈だ。「わが散文詩」(「玄関」)「春の夜」「悠々荘」は、本格小説「玄鶴山房」の先駆を成す作品群である。これから「玄鶴山房」(「二」「三」「四」「五」)を考えて行くに就いて、田端の芥川龍之介の家族構成が、看護婦からの聞き書き、覚え書きと同じく重要である。親しい友人に家族構成の複雑さを、その悩みを訴えた芥川龍之介であったが、この時期の関心事は具体的には義兄西川豊の鉄道自殺であり、鶴沼東屋旅館にまで付き纏う異母弟新原得二の存在である。実姉新原ひさと最初の夫葛巻義定との間の子供(義敏、さと子)の内、葛巻義敏は実母の西川豊との再婚(長女瑠璃子、長男兎を儲ける)で芥川龍之介宅に身を寄せていた。これに養父母、実母ふくの姉ふきが同居していた訣である。芥川龍之介の三人の子供は幼く、複雑な血縁関係の扶養家族がひしめいている現状である。経済的に精神的に芥川龍之介の生活を支える存在は、周辺に皆無である。本来なら芥川龍之介を側面から支える立場にあつた芥川文夫人の実弟塚本八洲は、重症の結核患者で病床に臥したままである。この惨憺たる状況は、「河童」(「改造」昭和

二年三月)で二ヵ月後に再描写されることになる。

2 (「二」)

堀越玄鶴とお鳥夫婦の娘であるお鈴と結婚して入り婿の形で老夫婦と同居する銀行員の重吉の反応は、芥川龍之介の私生活の細部を記述する。帰宅時に堀越家の門を潜ると老人性結核の舅玄鶴の体臭を覚え、自己の臭覚を訝しく思う。

豪傑肌の父親よりも昔の女流歌人だつた母親に近い秀才だつた。それは又彼の人懐こい目や細つそりした顔にも明らかだつた。(「玄鶴山房」二)

堀越玄鶴の入り婿になった銀行員の重吉は、堀越玄鶴の家族と異質の存在である。玄鶴の娘である妻のお鈴と息子の武夫との居間での団欒を楽しみ、舅や姑の居る離れの住空間とは別の生活を営む彼の日常は、「澄江堂」サロンでの芥川龍之介の私生活の反映である。看護婦の甲野が、同居するようになってから一人息子の武夫が必要以上にはしゃぐのを父親である重吉は認識し、息子に一人の男を感じる。この辺の感覚は、作中人物の日常生活に仮託された芥川龍之介のものである。後年、ビルマで戦死することになる次男多加志を遠望してその生涯を案じた生前の芥川龍之介の姿が、編集者により記録として残されている。

「玄鶴山房」の夜は静かだつた。(中略)かう云ふ「離れ」に聞えて来るものは植え込みの竹の戦ぎだけだつた。(「玄鶴山房」二)

この辺の描写を宇野浩二「芥川龍之介」(「二十三」)は、賞賛していて孤独の中で「竹の戦ぎ」を聴くのは作者であるとし、玄鶴の孤独さらには見守る夜伽の看護婦の孤独を造型する作者の陥った最晩年の孤独に思いを致した。私小説作家宇野浩二は、作中人物玄鶴が経済的な隆盛を極めた時期、幸福の絶頂にあつたときにも個人的には満足な生活、精神的な静謐を得られなかった現実を取り上げている。「しかしそこにも儕輩の嫉妬や彼の利益を失ふまいとする彼自身の焦燥の念は絶えず彼を苦しめてゐた。」(「玄鶴山房」五)、年少にして高架に登った芥川龍之介の生涯の主題は、同世代からの嫉妬心をいかにかわすかであった。この生涯に及んで続けられた彼のこの努力は、最終的には成功しなかつた。若さ、

学歴、学識、容貌さらには安定した経済的基盤どれ一つとっても衆人の嫉妬の対象にならないものはない。自己の持つ属性を韜晦すべき具体的、有効な手段を芥川龍之介は死に至るまで講じなかった。彼と同じような経歴を持つ菊池寛は、社会的地位、財力では晩年芥川龍之介を追い抜いたが、自己の素質を韜晦される必要を感じなかった筈である。菊池寛の場合、その容貌、体型が既に世人の嫉妬心を韜晦させている。

宇野浩二は、親しい友人でありながらも芥川龍之介の持つこの種の精神的焦燥と無縁であった。しかし、宇野浩二は彼の側からの別の視点の解釈を下す事を忘れていない。精神的、肉体的に後退したこの時期は、芥川龍之介が、『「儕輩を嫉妬」し、創作力を回復しようとする焦燥の念に駆られてゐたのではないか。』（「芥川龍之介」二十三）と云う指摘である。「鼻」（「新思潮」大正五年二月）を夏目漱石に激賞されて文壇を駆け上っていった芥川龍之介を揶揄して宇野浩二は、「龍介の天上」（「解放」大正八年五月）を書いて同世代の新星であった芥川龍之介をからかった事が思い出される。

3（「三」）

「玄鶴山房」（「三」）では、隆盛時代の玄鶴の名残である愛人お芳、文太郎母子が登場することで新しい局面を迎える。玄鶴が病床に伏すと同時にお芳は、千円の手切れ金で身を引き息子文太郎の月々の養育費を条件に両親の居る上総の或海岸に逼塞する。お芳には、東京の場末に肴屋を営む兄の存在がある。こうして死の床で呻吟する玄鶴の周囲を血縁関係の希薄な情の通わない扶養家族が取り囲むという状況である。玄鶴とその妻お鳥、さらに娘のお鈴、この娘と結婚した入り婿重吉と一人息子武雄が本来の家族構成である。この家族を扶助する為に玄鶴の故郷信州から呼び寄せた女中のお松、さらに結核で倒れた玄鶴専属の看病に雇われた看護婦の甲野がいる。死の床に呻吟する玄鶴の病床に愛情希薄な、経済力のない疎遠な人間が蠢いているという設定である。これが田端の芥川龍之介の家族構成を再構成したものであることは、言を待たない。この時期に、肴屋の兄を通じてお芳から手伝いの申し込みがあったのである。

娘のお鈴は、母のお鳥に相談して結局は、この申し込みを受け入れお芳、文太郎の母子は玄鶴の屋敷に住み込むことになるのである。この辺の事情は、お芳の「（前文省略）お手でも足りませんやうなら、御看病に上りたい（後文省略）」という申し込みを娘のお鈴から聞いた母のお鳥の「彼女の言葉をどうしても素直には取り上げなかつた。『これがまだあたしの耳へはひらない前ならば格別だけれども一お芳の手前も羞しいやね。』（「玄鶴山房」三）というやり取りである。このやり取りを理解する為には大正期に厳然として存在した身分制度を理解しなくてはならない。お鳥は「或大藩の家老の娘」であり、入り婿の重吉は「知事などにもなつた或政治家の次男」である。これに反してお芳は「女中上り」の身分で、お芳の意識は「彼女自身の履き物や男の子の靴を揃へ直した。」（「玄鶴山房」三）という動作から知られる。お鳥は、お芳の背後にいる貧しい血縁の人々の野心を警戒し、さらに「大藩の家老の娘」である自分が、玄鶴の正妻として妾の介入を阻止できない、さらには玄鶴の家庭の下降を妾のお芳にさらけ出すのが不本意であるというのが、上記「玄鶴山房」（「三」）のお鳥の発言の真意である。

「玄鶴山房」全体に救いはないが、作者の側としては幾つかの救済の道を用意していると思える。「それからその漁師町に住まなければならぬお芳親子も。（中略）リブクネヒトを読みはじめた。」（「玄鶴山房」六）と作品終結部にあるように、この二つが作者の意識では救済を予告するものであった筈である。これについては後半で再度論じるが、お芳、文太郎の母子の存在について言及しておきたい。

お芳は愈後後れのしたやうに古い新聞紙の包み一つ、茶の間へ膝を入れる前にそつと台所の隅へ出た。（中略）「これは、あの、大森でございます」（「玄鶴山房」三）

お芳は、どんな女であるか。作者は幾つかの点描で妾のお芳が玄鶴にとって人生唯一の救いであったことを記述している。その具体的な記述を証左してみると、①「存外彼女が老けたことを感じた。」（「三」）②「古い新聞紙の包み一つ」（「三」）③「発音する田舎訛りを改めなかつた。」（「三」）、これらの説明からお芳の人柄は、自ずと言外に伝わ

るように設定されている。

①からは、お芳の普段の質素な生活振りが窺えるし、②からは虚飾のない生活ぶり、実人生を必死に生きる女の生の姿をかいま見せる。③はお芳の生まれ故郷上総の海岸での自然な生活ぶりの反映である。「玄鶴山房」(「三」)で知り得る限り、お芳は玄鶴に愛された唯一の存在であり、玄鶴の幸福の対象であったことが作中で描き尽くされていると思う。こうした理解で以下の文脈が本文中で生きてくるのである。

玄鶴はお芳を囲ひ出した後、省線電車の乗り換えも苦にせず、一週間に一二度づつは必ず妾宅へ通つて行つた。(「玄鶴山房」三)

老人の玄鶴が、お芳の許に通い続けたのは性欲ではなく、精神的慰安が目的であった事が判明する。文太郎の存在は、こうした玄鶴の安らぎ、平穩の生活の結果としてみるべきである。それは、玄鶴がお芳の妾宅に羅両峯の画を持ち込んだ行為からも伺い知ることが出来る。志賀直哉「沓掛にて一芥川君のこと」(「中央公論」昭和二年九月)には、「鯛の鹽焼を食はされた」という発言と谷崎潤一郎に聞いたという広津和郎に対する芥川龍之介の人物評「煮豆ばかり食つて居やがつて」という二つの芥川龍之介発言を記載しているが、この発言に言及して芥川龍之介を理解した志賀直哉は、友人間で自己を韜晦する自意識過剰の芥川龍之介の真実が理解できなかったと言える。

晩年の玄鶴にとっては、お芳一文太郎母子との語らいが人生の慰安のひとつであったことは傍証から伺い知ることが出来る。それは、玄鶴が書画骨董の類の多くをお芳親子の住む妾宅に運んだことである。この行為は、妾宅に住む母子に自分の没後の経済的な不如意を和らげたいという玄鶴の無意識の好意の顕れという理解は論外である。玄鶴の週に二回程度のお芳との時間が、平穩な安らぎを齎すものだったからこそその有効な書画骨董の類であった。羅両峯の画を鑑賞する為には精神の静謐が必要であるということである。「まさかお父さんも羅両峯の画がお芳にわかるとも思つてゐないんでせうが。」(「三」)という息子重吉の発言には、玄鶴山房での玄鶴個人の家庭的な孤独が知られる。筑摩全集類聚脚注「羅両峯」(「中国清代の画家、揚州の人。(中略)号は両峯または花之。写眞、山川、人物、花竹の画をよくし、超現実的な神経の感覚を表現したのが特色。)

玄鶴の娘お鈴は、お芳が女中だった時から内気な彼女に好意を抱いていたが、「東京の或場末に着屋をしてゐるお芳の兄は何をたくらんでゐるかわからなかつた。」(「三」)という認識は、彼が「玄鶴の秘蔵の煎茶道具なども催促されぬうちに運んで来た。」(「三」)という行為で雲散霧消する。宇野浩二は、「枯野抄」について善意の人が皆無で、悪意の人ばかりであると評したが、「玄鶴山房」では上総の或海岸で育つたお芳とその兄は善意の人である。これに反して玄鶴山房の内部は、魍魎の世界で救いはない。玄鶴の義理の息子は、部外者として山房に臭気を覚えている。

彼はこの数日以来、門の内へはひるが早いか、忽ち妙な臭気を感じた。それは老人には珍しい肺結核の床に就いてゐる玄鶴の息の匂だつた。が、勿論家の外にはそんな匂の出る筈はなかつた。(「二」)

玄鶴と血のつながりのない義理の息子は、山房全体に嫌悪の匂いを生理的に感じている。

4 (「四」)

玄鶴山房にお芳、文太郎の親子が身を寄せるようになってから家庭内に生じた波紋を描く。第一の軋轢は、本家の孫である武夫と妾の子供である文太郎の同世代の男の子同士のそれである。これは直ちにそれぞれの母親であるお鈴とお芳の戦い、二人の山房内での身分違いを鮮明にするものでもあった。二人の母親の言い分は、今日ではお芳とお鈴の二人の女の家庭内、玄鶴山房内での身分の相違を鮮烈にしている、さながら公家社会の序列を思わせる隠微な内に籠もったそれである。

(お芳)「坊ちゃん、弱いものいぢめをなすつてはいけません。」(お鈴)「お前が一体我儘なんです。さあ、お芳さんにおあやまりなさい、ちゃんと手をついておあやまりなさい。」玄鶴の娘お鈴は、自分の息子武夫を妾のお芳の面前に引き据えることで、大義名分を楯に自分の父の妾親子を土下座させる。こうした家庭内の劇を作品形象化し得る才能は、芥川龍之介独自のものであって他の追隨を許さない。当時の田端家庭内での芥川龍之介の複雑な人間関係を反映したのもであると同時に、家庭内で幼児より彼に接していた芥川儔の存在を窺わせる。養父芥川道章の妻儔は、幕末の大通細

木香以の姪で芥川龍之介に消え去り行く江戸の名残りを伝えた。

お芳、文太郎の母子が玄鶴の最愛の存在であるという前提の確証は以下の一文からも知られる。「彼女は玄鶴にはお芳親子に同情のあるらしい素振りそぶりを示した。」(「四」)、玄鶴は娘のお鈴と孫の武夫と些細な争いを繰り返すお芳と息子文太郎に思いを馳せるが、その沈痛を冷笑を浮かべて享樂するのが看護婦甲野である。甲野は、自己の女としての肉体を武器に重吉を挑発することで平穩な結婚生活を送るお鈴に挑戦するが、お嬢様育ちの玄鶴の娘には効き目はない。苛立つのは、女中のお芳に夫である玄鶴を奪われた姑お鳥である。

「重吉、お前はあたしの娘では一腰ぬけの娘では不足なかい？」(「四」)

他人の不幸を目撃することで喜びを享受する体質である甲野の企みは、重吉、お鈴の夫婦仲を引き裂く程に効果的ではなかったが、姑お鳥の平穩を乱すには、十分な役目を果たした。お芳母子が、祖父母の住む上総の或海岸に引き上げることが決まってから、姑お鳥の苛立ちは最高潮に達する。自分が蒔いた嫉妬の炎が、家庭不和の原因となり効果を出したことを十分認識した看護婦甲野は、会心の笑みを洩らすのである。この箇所について室生犀星は「芥川龍之介の人と作」で賞賛している。

甲野はこの声を聞いた時、澄み渡つた鏡に向つたまま、始めてにやりと冷笑を洩らした。それからさも驚いたやうに「はい唯今」と返事をした。(「四」)

他人の不幸を享樂する性質の不幸な私生活の看護婦の介入で根底から崩れる程に玄鶴の家庭が脆い事、家庭内の構成員がすべて疑心暗鬼に囚われている事、「玄鶴山房」の悲劇の背後には芥川龍之介の複雑な家庭の反映がある。「玄鶴山房」の筆致を支えているのは、幼児より養家に育ち、我がままらしい事を主張する事無く生を終えようとしている芥川龍之介の意識である。すでに二ヶ月前に「点鬼簿」(「改造」大正十五年十月)で危機に陥った自分を救出してくれる女人の幻想を求めた。

5 (「五」)

お芳が玄鶴山房を立ち去った後に玄鶴が直面したのは、真の孤独である。迫り来る死に怯えながら床の上で呻吟し人生の総決算をするのである。彼の玄鶴山房における死の床での人生の回想は、再度「西方の人」「續西方の人」で繰り返される。玄鶴山房での死の呻吟は、即芥川龍之介最後の煩悶であるが、彼の死は甚大な影響を周辺の作家たちに与え、谷崎潤一郎、堀辰雄、佐藤春夫等の人生を規制した。玄鶴に託された死の床での芥川龍之介の苦悶は、文壇を変型させ消滅させたとも言える。衰弱と苦悶の果てに絶命する玄鶴に救いはない、周辺は好奇心と多大な興味とさらには喜びで彼の絶命する時を見つめる。人生の辛酸を嘗め尽くして他人の不幸の目撃者になる事だけが、人生の目的と化した看護婦甲野に見守られて人生の終末を迎えなくてはならない。

花札や酒に日を暮らした当座は比較的彼の一生でも明るい時代には違ひなかつた。しかしそこにも儕輩の嫉妬や彼の利益を失ふまいとする彼自身の焦燥の念は絶えず彼を苦しめてゐた。(「五」)

彼芥川龍之介の生涯の主題は、「儕輩の嫉妬」を如何にかわすかであった。「我鬼窟」「澄江堂」サロンは、こうした芥川龍之介の苦肉の作であったが、逆効果であった。濃厚な文学集団が、さらなる嫉妬とやっかみを生んで芥川龍之介を追い込んで行つた。冷笑を浮かべて死に行く玄鶴を見守る看護婦甲野の視線は、死に瀕した芥川龍之介を固唾を呑んで見守る友人達の象徴である。この時期、芥川龍之介の現状放棄、離脱は海外視察、移住以外にないが日本人の彼にそれは叶わぬ夢であった。彼自身こうした離脱の夢を嘲笑した「マドリツドへ、リオへ、サマルカンドへ、一僕はかう云ふ僕の夢を嘲笑はない訣には行かなかつた。」(「齒車」五)。海外移住の代わりに谷崎潤一郎、堀辰雄は関西、軽井沢に移住し芥川龍之介流の文壇を捨てた。煩い文壇雀の賞賛、絶賛さらには蔑視、嘲笑的になることから身をずらして作家としての人生を全うした。

「玄鶴はだんだん衰弱して行つた。」(「五」)、肉体的衰弱により精神もその制御を失っていく。死の床で彼は、政争相手を倒した者、不道徳な行

為を成した者、経済的不正を成した者を追想して慰めを得ようとするも甲斐がなかった。玄鶴が、絶対孤独に向かい合うのは、お芳親子が山房から立ち去った後である。「玄鶴はお芳の去つた後は恐い孤独を感じた上、長い彼の一生と向ひ合はない訣には行かなかつた。」(「五」)という記述は、玄鶴の抛り所が何処にあるかを示している。玄鶴のお芳親子に対する執着は、自己の消滅と同時に相手の死を望む程に強烈なものであった。「少くともこの一二年は何度内心にお芳親子を死んでしまへと思つたか知れなかつた。」(「五」)、この辺の死の床での玄鶴の述懐には、芥川龍之介の伯母芥川ふきに対する愛憎の反映がある。「(彼は或夜の夢の中にはまだ新しい花札の『桜の二十』と話してゐた。しかもその又『桜の二十』は四五年前のお芳の顔をしてゐた。)(「五」)、死期が迫った老人の幻覚とも思しき夢に、自分と馴染んでいた頃のお芳の顔の輪郭が迫って来る。さらに、幼児の記憶がこれに重なる。

彼は度たび夢うつつの間に彼の両親の住んでゐた信州の或山峡の村を、一殊に石を置いた板葺き屋根や蚕臭い桑ボヤを思ひ出した。(「五」)

「玄鶴山房」作品内部の人間関係は、明らかに「澄江堂」サロンに出入りした後輩作家横光利一「機械」に影響している。さらに瀕死の病床にある玄鶴の夢の形態は、同じく「澄江堂」サロンの常連であった川端康成「山の音」の作品構成に関与している。平岡敏夫『「玄鶴山房」論』では、病床の玄鶴の夢と芥川龍之介「夢」(「未定稿」昭和二年)との関係について言及している。「夢の中に色彩を見るのは神経の疲れてゐる証拠であると云ふ。」(「夢」大正十五年十一月)という記述の六年前に「雑筆」(「夢」)において、「夢中の出来事は、時間も空間も因果の関係も、現実とは全然違つてゐる。しかもその違ひ方が、到底型には嵌める事が出来ぬ。」(「人間」大正九年十月)という夢の記述に対する見解を述べた。未定稿「夢」は、こうした過去の夢に対する見解を踏まえて作品化した小品である。

疲労困憊、不眠症で憂鬱症に陥った画家である「わたし」は、裸体のモデルの女の肉体に圧倒されて夢の中で彼女を絞殺するが、不在の彼女を探し続けている内に自分の行為を己に夢中で体験し

ている事に気付く。運命の予兆を、或は自己の行為の意味を正確に認識せずに事前に夢中で体験した後に実体験する作品構造である。

「雑筆」(「夢」)(「人間」大正九年十月)で夢を形象化する上での覚え書を記述した芥川龍之介は、「夢」(「婦人公論」大正十五年十一月)で北原白秋と思しき詩人と語り合う夢中の行為を脈絡の無い文脈に記述した。前後関係が有機的関連の無い色彩と臭覚の夢の記述、「夢」(「婦人公論」)の連続で「玄鶴山房」での玄鶴の二つの夢を理解出来る。「玄鶴山房」欄筆後に夢の脈絡のない在り様を未定稿「夢」で前衛的な超現実主義の手法で形象化して見せた。「玄鶴山房」から未定稿「夢」での連鎖的な一連の記述は、「山の音」の作品構成に示唆を与えた。玄鶴が、瀕死の死の床で最初に見る故郷信州の夢は「山の音」に摂取されたのと同じく、二度目の夢は中島敦「牛人」(「盈虚」)に影響しているように思う。

一時間ばかりたつた後、玄鶴はいつか眠つてゐた。その晩は夢も恐しかつた。彼は樹木の茂つた中に立ち、腰の高い障子の隙から茶室めいた部屋を覗いてゐた。そこには又まる裸の子供が一人、こちらへ顔を向けて横になつてゐた。それは子供とは云ふものの、老人のやうに皺くちやだつた。(「五」)

この夢の意味する物が、ある種の象徴化体験(「Symbolerlebnis」)である事は理解できる。吉田精一「近代文学研究大系 芥川龍之介」(「有精堂」)の頭注では、「齒車」(「第三章」)での「ミイラに近い裸体の女」との関連を指摘する。この指摘が有効であるならば、明らかにこれは夢中での強迫観念(「Zwangsvorstellung」)の一種として理解しなくてはならない。玄鶴の死の床で彼を脅かす「老人のやうに皺くちや」な子供は、玄鶴の死後のお芳の息子文太郎の運命の暗示か、あるいは自己の一生を暗示する象徴的記述かも知れない。

観音経を唱へて見たり、昔のはやり歌をうたつて見たりした。しかも「妙音観世音、梵音海潮音、勝彼世間音」を唱へた後、「かつぼれ、かつぼれ」をうたふことは滑稽にも彼には勿体ない気がした。(「五」)

前掲、吉田精一頭注に抛れば、「観音経」(「妙法蓮華経《法華経》第八卷第二十五品《観世音普

薩普門品》」の別称、とある。法華経を唱える行為そのものが、当時の時代風潮であったかも知れない。日蓮宗各宗派に属する者に、宮沢賢治（「田中智學の国柱会」、石原莞爾、北一輝等が有名で北一輝は、刑死直前愛唱の法華経一卷を息子大輝に遺品として遺した。「かつぼれ、かつぼれ」も前掲吉田精一頭注に拠れば、「かつぼれ、かつぼれ、甘茶でかつぼれ、塩茶でかつぼれ、ヨーナ、ヨイヨイ。」という俗謡でお座敷の酒宴の席で裸踊りの時に伴奏する。死の床の玄鶴の精神は、厳肅さと滑稽の間を揺れ動く訣である。瀕死の玄鶴の視界に「黄檗の一行もの」が見えるが、吉田精一頭注は最初これが「大徳寺の一行もの」であった事を明かす。禅宗の内では栄西の臨濟禅より、道元の曹洞禅の方が良いという判断は、後者に自力更生の要素が高い事であろう。吉田精一脚注に拠れば、この変更は下島勲「芥川龍之介と書画」に拠ると下島自身の助言による。芥川龍之介は、下島勲の助力で黄檗宗の僧高泉の書を落手している。「猶矢張御話しの高泉の書小生などの手にも入るものに候や」（「下島勲宛書簡」大正八年二月二十四日）、この直後の書簡に「軸は二つとも書斎にぶら下げて大喜びで見えてます」（「下島勲宛書簡」大正八年三月九日）、この書簡の「軸は二つ」については、「筑摩全集別巻 芥川龍之介全集」脚注に拠ると高泉和尚の書いた「梅」という茶掛と漱石の「風月相知」の二つである。遺稿「わが家の古玩」（「遺稿」昭和二年六月）に「高泉、慧林、天祐等の書各一幀」とあるのがそれである。

彼は仰向けになつたまま、彼自身の呼吸を数へてゐた。それは丁度何ものかに「今だぞ」とせかれてゐる気もちだつた。（「五」）

玄鶴が自殺を実行しようとして孫の武夫に目撃され縊死に失敗する場面であるが、「或阿呆の一生」（「四十四」）、さらには「齒車」（「六」）で繰り返される場面である。

6（「六」）

一週間ばかりたつた後、^{のち}玄鶴は家族たちに囲まれたまま、肺結核の為に絶命した。彼の告別式は盛大（！）だつた。

死の床で呻吟しながら自殺に失敗して絶命した玄鶴の葬儀が盛大だった。「告別式は盛大（！）」

だつた」は勿論作者に拠る皮肉である。これを客観小説、写実小説の筆致で記述すべきであるなら「告別式は盛大（？）だつた」でなければならない。玄鶴の遺骸は、入婿重吉の特別の配慮で火葬場では一等の竈^{かまど}で焼いてもらう手はずであったが、二等の竈しか残されていなかった。しかし、担当の係りの老人の配慮で玄鶴の遺骸は、本来の一等の料金で特等の竈^{かまど}でたび茶毘に付すことになる。骨上げまでの時間帰宅する重吉は、馬車の上から茶毘に伏せられる玄鶴を見守るお芳の姿を目撃して狼狽する。こうして作者は、絶命して果てた死後の玄鶴に二人の好意的人物を配することで、玄鶴の魂に人道主義的な配慮をしたと言える。

すると意外にもお芳が一人、煉瓦塀の前に佇んだまま、彼等の馬車に目礼^{もくれい}してゐた。重吉はちよつと狼狽^{らうばい}し、彼の帽^{ぼう}を上げようとした。

（「六」）

遺骸となって山房の外に運び出された玄鶴に無償の好意を示す二人の人物、結局玄鶴の救いは山房の外の世界にあった訣である。

「世間を愛しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば」（「山上憶良」）で離脱不可能な閉塞空間に閉じ込められた時に絶望が、訪れる。玄鶴は、遺骸になって山房の外に運び出された時に救済が訪れた事になる。彼自身それを自覚していたが、それは芥川龍之介の実感に裏付けられたそれである。「何、この苦しみも長いことはない。お目出度^{めでた}くなつてしまひさへすれば……」（「五」）、彼芥川龍之介にとっては田端の養家こそが、人生の桎梏であった。鶴沼の東屋旅館への退避生活、さらには父母妻子からの逃亡を画策したが（鎌倉の小町園の女将野々口豊子宅に滞在した期間）、全ては無駄であった。「玄鶴山房」執筆中の芥川龍之介は「鎌倉を引き上げたのは一生の誤りであった」（「題型芥川龍之介」三十六）と述懐した。玄鶴の遺骸となって山房の外に開放される人生を以後の芥川龍之介は、なぞってゆく事になる。

僕は養家に人となり、我儘らしい我儘を言ったことはなかつた。（と云ふよりも寧ろ言ひ得なかつたのである。僕はこの養父母に對する「孝行に似たもの」を後悔してゐる。しかしこれも僕にとつてはどうすることも出来なかつたのである。）今僕が自殺するのは一生に一度の

我儘かも知れない。(「遺書」)

半年後に訪れる自己の運命の先駆けの人生を玄鶴に歩ませた芥川龍之介ではあったが、「玄鶴山房」(「六」)で問題になるのは、上総のある海岸の漁師町に生きねばならないお芳親子を気遣う重吉の従弟の存在である。彼が、お芳母子の行末を案じる自らの思慮を振り切る為に英訳のリブクネヒトの読書に没頭する場面で「玄鶴山房」は、終結する。一読の限りでは、芥川龍之介は来るべき社会主義革命に救いを見出すことで作品世界を閉じたことになる。吉田精一「近代文学注釈大系芥川龍之介」頭注は、「中野君ヲシテ徐々ニ小説ヲ書カシメヨ。今日ノプロレタリア作家ヲ抜クコト数等ナラン。」(「室生犀星宛書簡」大正十五年十二月五日)を引用し、馬車で社会主義の資料を読みふける重吉の従弟に中野重治を擬した。一種の宗教的救済により作品世界を閉じたことになるが、社会主義革命に芥川龍之介自身は何らかの期待を寄せたのであろうか。ロシア革命の八年後に田端の自宅で生活する芥川龍之介は、社会全体を下降させ、劣化させる革命の実態について、十二分の認識を有していた。最初の軽井沢滞在一ヶ月の間に系統的に英語の社会主義の文献資料を読了しているが、ロシア革命の現実についての情報はその後の蓄積であろう。「新潮日本文学アルバム芥川龍之介」は、軽井沢滞在中に芥川龍之介が読んだ社会主義文献、ロシア革命の状況に関する最新の文献(「芥川旧蔵書」)を写真版で載せている。ウィルヘルム・リーブクネヒト「KARL MARX Biographical memoirs」が目を引き、こうした情報を基に木村毅に語った言葉が、残されている。「君は、中間の無産政党の、何だか役員になったらしいが、革命でもおこったら、あぶないよ」(「芥川龍之介の思い出」)、この時期「玄鶴山房」創作に呻吟していた芥川龍之介は、「或社会主義者」(「東京日日新聞」昭和二年一月三日)を書いている。学生時代に社会主義に目覚めた人物が、「リブクネヒトを憶ふ」の一篇の論文を執筆した後、実生活の充実と満足の時間の中で社会主義思想を忘れてゆく。彼の論文に触発されて社会主義革命の実践運動に飛び込んだ後進のある事を彼は知らない。雑誌社の重役となった彼は、社会主義者であった青年時代を懐かしく思い出している。社会主義革命を放棄した彼は、

「人間的に、恐らくは^{あま}餘りに人間的に。」(「或社会主義者」)自分の過去の青年時代を思い出している。この作品の記述の裏面には、社会主義革命が非人間的な、余りに非人間的な側面を持つ事を情報として熟知していた芥川龍之介の側面がある。「それからその漁師町に住まなければならぬお芳親子も。一彼は急に^{はは}険しい顔をし、いつかさしはじめた日の光の中にもう一度リブクネヒトを読みはじめた。」(「六」)は、幸福の予兆としての意味は無いであろう。作品執筆時に芥川龍之介が得ていたロシア革命の実態把握から類推するに、「玄鶴山房」終結部には救いは感じられない。貧しいお芳親子と自己の人生が、直面するかも知れない最大限の革命の惨劇に対する畏怖であった可能性が高い。それが重吉の従弟の動作「彼は急に^{はは}険しい顔をし」(「六」)の意味であろう。

むすび

塚越和夫「玄鶴山房」(「批評と研究芥川龍之介」所収)は、芥川龍之介の看護婦からの聞き取りと「玄鶴山房」との考証をしている。さらに「玄鶴山房」(「一」「六」)が、先に成立して作品本体である「玄鶴山房」(「二」「三」「四」「五」)は、苦闘の末に後から創作された事情について記述している。上記の二つの成立事情については、宇野浩二「芥川龍之介」に早くから言及されている。こうした芥川龍之介の創作手法については、後年谷崎潤一郎が、「雪後庵夜話」(「中央公論」昭和三十七年六月～九月)で回想している。宇野浩二の言うように「玄鶴山房」(「二」「三」「四」「五」)は、芥川龍之介の最後の客観小説、本格的小説であり、山房内で絶対孤独の中で絶命する玄鶴の姿は、作品のこの部分を田端の「澄江堂」で書き続ける芥川龍之介の自画像に重なる。

「玄鶴山房」(「五」)の玄鶴が縊死を企てる場面について、「近代文学注釈体系芥川龍之介」(「有精堂」)の頭注で吉田精一は、宇野浩二「芥川龍之介」の記述を引用して「或阿呆の一生」(「死」四十四)と「歯車」(「飛行機」六)との重複を指摘する。この場面は、看護婦甲野と玄鶴の心理劇の要素があるが、正確に読み通す為には芥川龍之介の自画像との重複の意味を精査しなくてはならない。玄鶴が、六尺の禪を手立てに縊死を計画する場面

であるが、この計画は看護婦甲野にいち早く見破られてしまう。自分の縊死の計画が、甲野に見破られてしまい、看護婦甲野の監視体制に置かれたことを玄鶴は、察知する。

玄鶴はやはり蒲団の側の禰の^{みづ}ことを考へながら、薄目に甲野を見守つてゐた。すると一急に可笑しさを感じた。「甲野さん。」甲野も玄鶴の顔を見た時はさすがにぎよつとしたらしかつた。玄鶴は夜着によりかかつたまま、いつかとめどなしに笑つてゐた。「なんでございます？」（「五」）

人生の悲惨を経て、他人の不幸の目撃者になる事をのみ生き甲斐にする女が、玄鶴の縊死を監視する姿は滑稽である。職席上の責任追及を恐れての行為か、看護の対象を失う事で生活難を覚えるの行為か、表面的には無為、放恣な姿を曝しながら二人の間は緊迫している。こうした状況を作った自らを玄鶴は、苦笑して自嘲せざるを得ない。

（玄鶴）「甲野さん。」（甲野）「なんでございます？」（玄鶴）「いや、何でもない。何にも可らしいことはありません。一」という二人の会話の意味は、自殺補助を強要されるかも知れない甲野の内心の恐怖と動揺さらには、こうした彼女の心の在り様を察知する玄鶴の自嘲のやり取りである。この箇所は、縊死の計画を平然と夫人に相談する芥川龍之介とそれを平常心で受け流す芥川文とのやり取りの変容である（「追想芥川龍之介」三十五）。

足腰が立たずに山房で死を迎えざるを得ない玄鶴の姿は、田端の芥川家に束縛され終生その頸木から離脱できなかった芥川龍之介の自画像である。鶴沼の東屋旅館での生活は現状離脱の模索の足跡である。「主人はなにからか逃れるためか、また何かをふっきるためにか、鶴沼へ来たように思えてなりませんでした。」（「追想芥川龍之介」四十四）、玄鶴と違って現実の芥川龍之介は、田端の芥川家を見限る道を模索している。鶴沼での半年に及ぶ生活は、意識の中では「マドリツドへ、リオへ、サマルカンドへ、一」（「歯車」五）である。この時期佐藤春夫との中国旅行さらには、恒藤恭との欧州紀行も肉体的衰弱の為に断念せざるを得なかった。結局、東京田端に逼塞せざるを得なくなり玄鶴と同じ道を辿る事になるのである。ダンテ「神曲」には、「他人のパンがいかに辛く／他人の家

の階段の^{のぼ}上り下りがいかに辛い道であるかを」（「天国篇」第十七歌）という有名な台詞があるが、この世の地獄の全てを経験し、他人の不幸の目撃者になるより仕方のなくなった看護婦甲野に見守られながら、絶命する玄鶴の人生を芥川龍之介はなぞるのである。

山房で最後を迎えた玄鶴に救いの道は、残されていた。彼の遺骸の茶毘に付せられる様をひっそり見守るお芳親子と行動し、山房を捨て去る事であった。愛の喪失で化け物と化した看護婦の監視の中で絶命する玄鶴の最期を踏まえて、芥川龍之介は「養父母に對する『孝行に似たもの』を後悔してゐる。」（「遺書」）と記述した。芥川夫人が、幼妻文ではなくて吉田弥生であつたら、海軍機関学校を辞して鎌倉を引き上げなければ、あらゆる痛恨の中で「玄鶴山房」擱筆後半年の後、芥川龍之介自身玄鶴と同じ道を辿るのである。

宇野浩二「芥川龍之介」には、「玄鶴山房」についての言及が多であるが、それには理由があつて鶴沼の東屋旅館の貸別荘「イの四号」から裏の二階建て貸別荘に滞在中の芥川龍之介を宇野浩二は訪ねている（「大正十五年十一月二十八日」宮坂登鶴年譜に拠る）。さらに「玄鶴山房」脱稿、発表後に病状悪化を辿る宇野浩二に芥川龍之介は、頻繁に会う事になる。宇野浩二の神経衰弱（松本清張「芥川龍之介の死」に拠れば、Syphilisである）を見舞つた芥川龍之介との会話が記録されている「二人とも、病気の事も、何も彼も、忘れてしまつた。（中略）『……君には、ちよつと云つたが、僕の家は、……』」（宇野浩二「芥川龍之介」二十三）。発狂した宇野浩二が、話題が文学の事に限定されると正常な意識に戻り、何ら遜色なく会話をこなすことは、友人広津和郎が書き残している（あの時代「群像」昭和二十五年一月、二月）。

この時期の芥川龍之介が、敵対した側の広津和郎、宇野浩二に接近したのは、敵讐の側に知己を見出したからである。玄鶴の一生でも比較的明るい時期にも「儕輩の嫉妬や彼の利益を失ふまいとする彼自身の焦燥の念は絶えず彼を苦しめてゐた。」（「五」）に就いて、肉体的に衰弱し、創作欲の衰えた芥川龍之介は、「儕輩を嫉妬』し、創作力を回復しようとする焦燥の念に駆られてゐたのでは

ないか。」(「芥川龍之介」二十三)と若い頃の敵讐てきしゅうであった宇野浩二は、卓抜な意見を述べた。衰弱した芥川龍之介が、執念となって客観小説「玄鶴山房」完成に賭けるのは、かつての全盛時代を取り戻す為の失地回復の意味があったという。そして生田長江訳「神曲」(「地獄変」第五歌)「フランチェスカは我に言ふ『悲しみの中にありて楽しかりし時を想ふより痛ましきはなし、……』」を引いている。

宇野浩二が指摘する更なる意見は、他人の苦痛を享受する以外に人生の目的を喪失した看護婦甲野に見守られて絶命する孤独な玄鶴が聞く竹の戦ぎであるが、「かう云ふ『離れ』に聞えて来るものは植ゑ込みの竹の戦ぎせよだけだつた。」(「二」)について、「竹の戦ぎ」を聞くのは作者である芥川龍之介であり、看護婦甲野の孤独も玄鶴の孤独も即作者のものであると言及している。宇野浩二はさらに、作品末の「もう一度リプクネヒトを読みはじめた。」(「六」)で「ウイリアム・モリス研究」を卒業論文にした芥川龍之介に言及している。

ウイリアム・モリス著「"News from Nowhere"」を友人の布施延雄ふせのびおに翻訳を勧め、彼が叔父の関如来という共産主義者に助言されて「無可有郷」(「莊子」帝王篇)という書名にしたという紹介である。「老子は時々無可有の郷に仏陀と挨拶をかはせてゐる。」(「西方の人」三十七)については、吉田精一頭注は「『莊子』応帝王より出る。自然のままに何ら人為のない楽土」(「日本近代文学大系 芥川龍之介」)と解説したが、「無可有の郷」の出所は、前記布施延雄の翻訳書名である事が判明した。リプクネヒト、カウツキイ、クロボトキン、マルクスについて宇野浩二は、「誰も彼も、若気の至りで、それらの本を、生嚼りなまかしでも、読んだものである。」(「芥川龍之介」二十)と回想している。芥川龍之介の術学趣味については、「マインレンデル」(「遺書」)の出所をメチェニコフ「人生論」(「文明協会」明治四十一年)であると広津和郎「あの時代」が、明かしている。

看護婦甲野の隙を見て縊死を図る玄鶴(「五」)は、結局「肺結核の為に絶命した。」(「六」)、この創作行為の裏面に作者の苦闘が、隠されている。作中主人公は「玄鶴山房」で絶命し、作者も作品かくひつ擱筆後に「澄江堂」で同じ運命を辿るも、現実の

芥川龍之介は野々口豊子(「鎌倉小町園の女将」)に窮状を訴えて打開の道を模索した。高宮たかみやだん「芥川龍之介の愛した女性」(「第二部」)に拠れば、野々口豊子は芥川龍之介の初七日の翌日(「昭和二年七月三十一日」)に弔問の為に「澄江堂」の書齋を訪問している。玄鶴の遺骸が茶毘に付される時、火葬場の隅に佇むお芳の存在が「玄鶴山房」に救いをもたらしたように、芥川龍之介死後一週間後に「澄江堂」サロンの一角に佇む野々口豊子の存在には格別なものがある。

玄鶴は、「玄鶴山房」内部の血脈関係を断ち切る事が出来ずに山房の自宅で家族に見守られながら絶命し、芥川龍之介も同じ道を辿る。しかし、芥川龍之介の方は遺書で二人の肉親との関係を絶縁している「僕は僕の死後、姉及び異母弟と義絶す」(「遺書」)。